Brought to you by

YAOI ARCHIVE

THE (UN)OFFICIAL ARCHIVE OF JAPANESE BL MEDIA

Please visit our website for more information and to learn how you can help.

**https://www.yaoiarchive.org/**

# b-BOY Zips ①

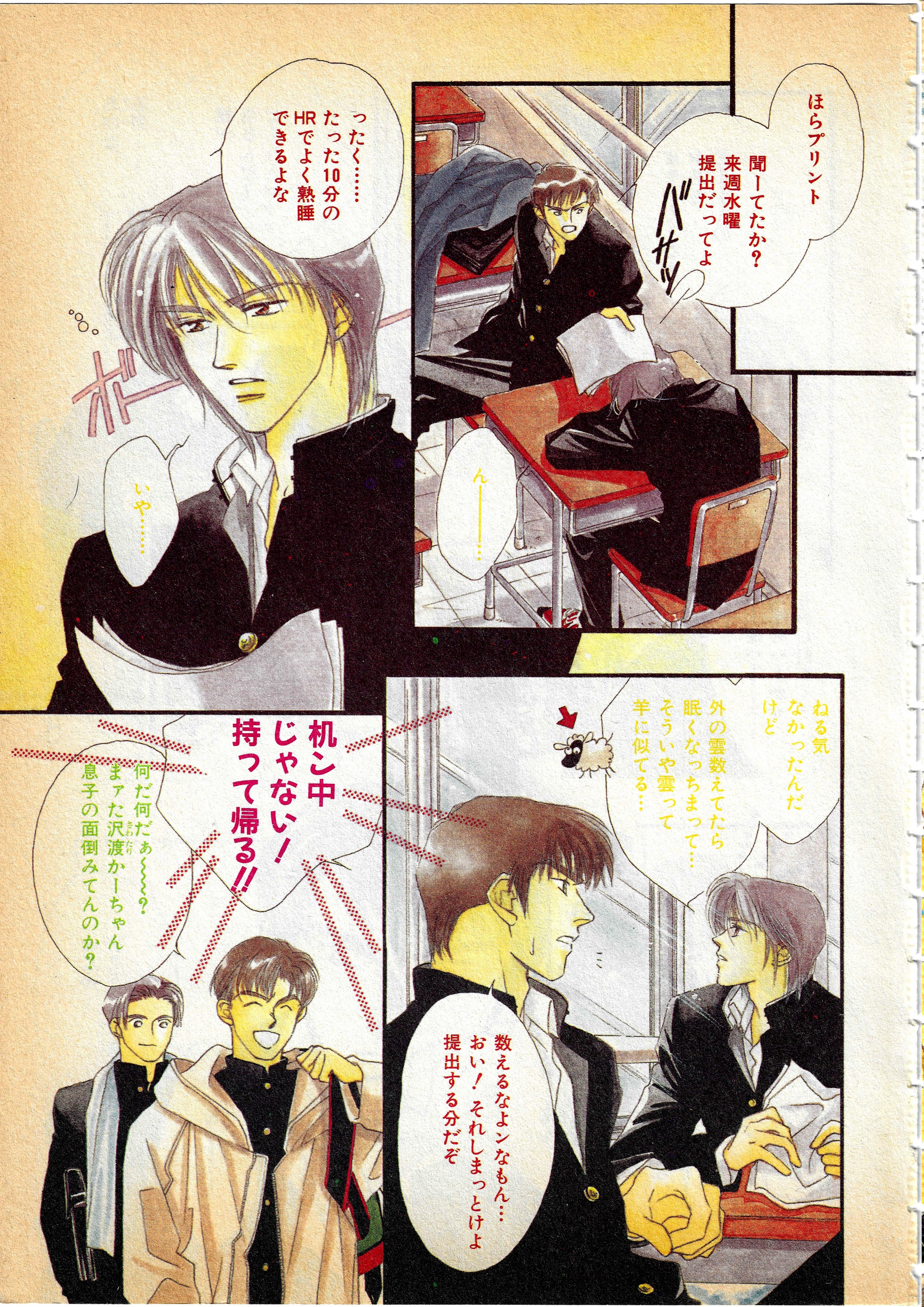
蓮川　愛／スロウ・アンド・ファスト 1
内田一奈／愛ノコトバ 33
美杉果林／カレイド・スコープ 49
果桃なばこ／ぼくがオトナになっても 93
七瀬かい／金ボタンが冷たい 125
夢殿りさ／GOLD 158
野守美奈／Trace 184
皇極あかね／言葉を失くした人魚たち 221
イラスト／桑原祐子
星崎　龍／You and I 245

読者のページ 87
コミックレビュー 90
b-BOY Zips次号予告 277

COVER ILLUSTRATION
内田一奈

# Contents

スロウ・アンド・ファスト
slow and fast
蓮川愛
——今のプリントは次の登校日に必ず提出すること
その日は卒業式の予行練習もあるから
自由登校ボケで遅刻なんかせんようにな
——以上
ガタン
起立!——礼ッ
ザワ
じゃあな——
ザワ
——でさァ
——椎名
椎名! おい 起きろ
ん……
HRもうおわったぞ


ほらプリント
聞ーてたか？
来週水曜
提出だってよ
バサッ
ん———…
ったく……
たった10分の
HRでよく熟睡
できるよな
ボー
いや……
ねる気
なかったんだ
けど
外の雲数えてたら
眠くなっちまって…
そういや雲って
羊に似てる…
数えるなよンなもん…
おい！それしまっとけよ
提出する分だぞ
机ン中
じゃない！
持って帰る!!
何だ何だぁ〜〜〜？
まァた沢渡かーちゃん
息子の面倒みてんのか？

スクール
ボーイズ
32p
親友だけじゃちょっとツライ。もう少し特別にしてほしい。
スロウ・アンド・ファスト
slow and fast
hasu kawa ai
蓮川愛

あのな 石野……
誰が 母さんだ？ だーれーがッッ
ボー
おい椎名！ ボケってんなよ お前も どーすんの
まんま だっつうの
なァ 昼どうする？ 食ってく？
……俺パ――ス…… 気持ちいーから も少しねてく……
んじゃ 行こうぜ 沢渡
ん――――
いや…俺も やめとくわ
こいつひとり 置いといたら 夜までねてそーだし
テキトーに 起こしてやんねぇと――――
うるっ
……沢渡ィ
お前って
ほんっとにえらいッ
俺讃えちゃう！ 功労賞モン!!
こんなポヨ～ン相手に よくぞここまでッ
いらねーよ
いいから行けよ お前ら……
じゃ また 来週な――――
おー
……り
？椎名
何だ
――い……
？
ちょっと寒い……
ちッ
しょーがねぇなァ もう

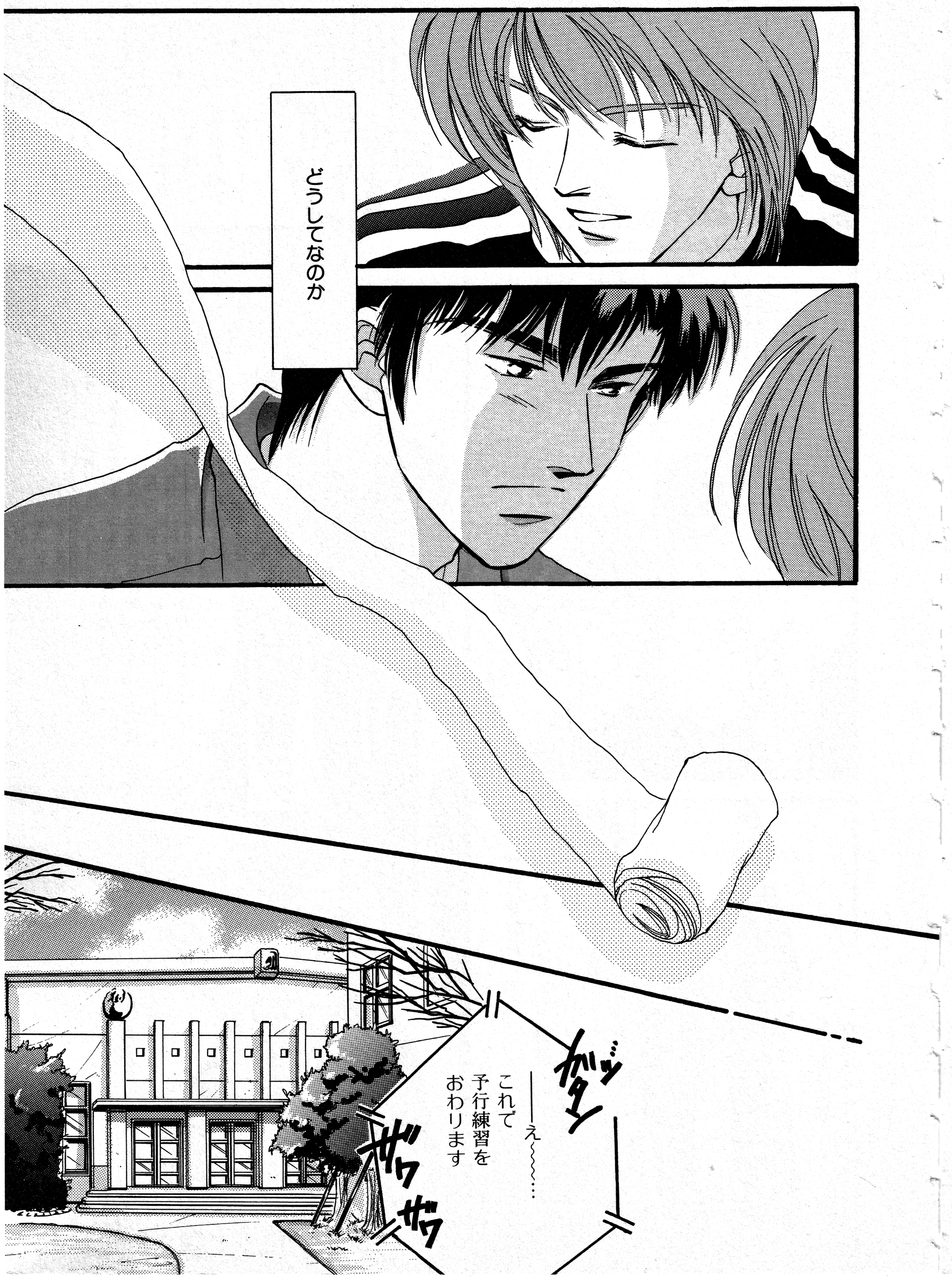
す…
——椎名は
どうも人と ワンテンポずれてる ところのある奴で
そのうえ トロイし
俺は何でも パッとやらなきゃ 気のすまない方だから
てきぱき
自分でもよくやるとは思ってるよ じゃマで
椎名のこういうトコ 気になって つい世話 やいちまう——んだけど
ぽー
でも
さすがに 最近思うんだよな
おい 椎名! そろそろ 起きろ
いくらこういう ヤツだからって
ちょっと俺 構い すぎなんじゃねぇ…?
…沢渡? 皆と行ったん じゃ……
ほっときゃ際限なく ねてそーなおヒメ様 のおかげで 留守番だよ
あれ……
これ沢渡の? 何で
寒いって文句 言ったの覚えて ねーのかよ
…そういや お前 上着は?
着てくんの忘れた
サンキュ

忘れたァ?!
気づかねーかフツー!
…ったく
ほら!
ぴっ
?
ん〜〜 何か寒いなとは思ったんだけど……
ねーよりマシだろ
ほっとけねーのは――
人の面倒見だってホントはいい方じゃないしなぁ 俺
♪
あったけー♥
…サンキュー沢渡

どーしてなのか
うーん
なにブツブツ言ってんの沢渡?
RRRR!
ガチャ
はい 沢渡でございます
――ちょっと お待ち下さいね
徹! 電話よ 椎名君から
もしもし
あ 沢渡? オレ
どーした?

今押し入れ片づけてたんだけどさ ヒマで
片づけぇ?! お前がか?
ちゃんとやれてんのかよ……
やってるよ
何か知らない本でてきて
沢渡のかなァ…全然覚えないんだ
何てヤツ?
え──っと…あれ?
っかしーな〜〜 さっき確かここに… ──あれぇ??
……
ヘンだなちょっと待…ッ
わ!!
椎名?! おいッッ
ダンボール倒しちまった …痛〜〜〜
…ヤバ 手首ひねった イテ〜〜〜
大丈夫かよ
へーきへーき
母さーん 塗布出して──
母さーん?
…?
とにかくさ 本みつけて またTEL かけ直すから──……
あ CD……!
がくう
しーん
…… ……あ
忘れてた 俺昨日から一人なんだっけ
父さん出張 母さん旅行で
……
今から行ってやるからちょっと待ってろ
も一動くな

ぐしゃ~
やっぱりやれて ねーじゃねぇか…
──って おい
なんか だんだん ワケわかんなく なってきて
さっきの本も みつかんねーし
とりあえず 手出せよ 塗布まだだろ
それが どこにあるか わからないんだ 母さん いないし…
──だろうと 思って家から 持ってきといた
さすが沢渡(さわたり)~~~
用意イイ──
つまんねぇ事 感心して ねーで さっさと座れッ
──ったく 気いつけろよな マジで
ピッ
ねんざはクセに なるんだぞ
はい 手出す! 袖めくる!!
…ほんと お前って どこでぬけてるか わかんねーよなァ…
くどくどくど
3年間一緒にいても まだ読めねーよ
俺も まだまだってか?
…そうだよなァ 俺もう3年も沢渡(さわたり)に フォローしてもらってんだよな
やっぱ 飽きちゃった?
な…何だよ いきなり
ごめん─
だって俺ら 大学も一緒だし
またメーワク かけちまう からな──とか…

べ…つに
慣れてるし
ほっとけないのは
……いいんじゃねぇの？
ホント？
ぎゅ
ならいいんだけどさ
だって何かもう沢渡がいてくれないと生きてけない気がしちゃってるから俺
……バーカ
大ゲサなんだよお前は……
「沢渡がいてくれないと」

どうしてなのか
ガタッ
ザワ
ザワ
これで予行練習をおわります
え〜〜〜……

3年生は各自教室に戻ってHRを
1・2年生は引き続き送歌の練習を――……
ザワ
ザワ
かったりィよなあ卒業式の予行なんて
第一冷めねぇ？やっぱカンドーってのはこう当日までおいとかねぇとさァ
俺なんかせーせーするねこーんな男の方が多いトコ！
あ〜〜〜女できねぇの数のせいにしてるぅ〜〜
るせッ
げっ石野お前まさか泣く気〜〜〜?!
椎名お前手もういいのか？
塗布とれてるみてぇだけど
あもう全然平気！ホラ

沢渡のおかげ
サンキュ♥
――
…何だろ
顔が見れねぇ
そ…んな
たいした事してねーだろ
手？椎名どうかしてたん？
ん
3-A
わはは
ん〜〜〜家でちょっとね
椎名がやりそうな事だよな〜〜〜沢渡なんで知ってんの？
ちょうどTELしててさ
誰もいねぇっつうから家まで行って手当てして――
…ちょっとじゃねぇだろ
こいつ家で片付けみたいな事してて ダンボール倒してコケたの！
…いうなよ沢渡……

整理手伝って ゴミ分別して ちり紙交換の オヤジの車 とめて帰った
どわははッ
あ〜ハラいて
さすがだ 沢渡〜〜〜ッ
なァなァ椎名! 俺いっぺん聞ーて みたかったんだけどさ
中学ン時とか どーしてたわけ? 沢渡みたいのいた?
え〜〜〜?
…そういや 委員長みたいのが 何か言ったりやったり してくれてた…ような
…… 覚えてねぇの?
みたいの?
だって そりゃ助かってたけど あんま気にした 事なかったって いうかァ……
興味なかったし
お前な〜〜 ちょっとキチクだぞ それ……
え そっかァ?
興味ない……?
じゃあ 俺も——?
まま また 大学で誰か みつけなさい
沢渡みたく カンペキに フォローして くれるみたいなさ
——何で? 沢渡とは同じ 大学で
こいつにとって
何でって…だって 学部違うだろ
高校みたく クラスが隣ってのとは 全然違うんだから
そう一緒に なんていらんねぇ だろ?
そばにいるやつなんて すぐ忘れちまうような …そんな程度なのか?
え…うそ
そんなモン なの…か?
オイオイ 何言ってんだ 今頃〜〜

だからァ
男なんかじゃなくて
メンドー見のイイ彼女
つくりゃいいじゃん
そういうイミじゃ
沢渡にだって都合
あんだろーしな?沢渡ッ
——
沢渡…にも…
そ…っか
そう だよな
誰か——他の
沢渡?
——すぐ
みつかんだろ
お前が興味なく
ても 何でもやって
くれるヤツなんか
そこらに
いくらでも
いんだろ
——
俺みたいに
あ おい
沢渡?!
ガラッ
お前HR…ッ
どうしたんだ
あいつ…?
なァ椎名
——

くそッ
興味ねぇ?
他の誰かだって?!
んな言い方
あっかよ
大体
あ――んな
ボ――ッとして
いまいち
ドンくさくて
――冗談じゃねぇ
超手がかかる
よーな奴の
メンドーなんか
心ッ底
好きじゃなきゃ
誰が――…ッ
え――

ゴン
心底
好きじゃなきゃ
ほっとけなかったのは
そ…そりゃ
友達なんだから
キライなわけ
ねーし……
―
沢渡!
…あいつの事
いえねーな 俺

ドン
気づくのに3年か?
そんで望みがねーときちゃ世話ねーよな
ハーッ
…ダッセーの
椎名を——
ひとりでほっとけないんじゃない
俺が
あいつの傍にいたかっただけだったんだ…
ほんと ダせぇ…
キーンコーン…!

ガラ
!
椎名?!
何……まだ残ってたのか?
……沢渡がもどって来ると思ってカバンあるしさ
今 こいつと
顔あわせてたくねぇ——
別に
先に帰ってりゃよかったのに

うん でも 色々…… 考え事 してたし
……
あのよ 一応あやまっとく
え?
皆と話してた時 俺 ちょっと 嫌な言い方したから
? 沢渡 何か言ったっけ
…ッお前なァ ボケてんのも たいがいに
ごめん でも 俺あの時 頭まっ白に なってた から……
沢渡と 一緒に居られないって 思ったらさ
な…?
俺――

え…
石野に言われる まで俺考えも しなかった
同じ大学だから ってずっと沢渡 と一緒だって 思い込んでてさ
そうだよな 高校とは違う んだし…それに
石野の言う通り 沢渡にだって都合 あるんだよ…な
…でもさ
他の誰か とか そんなの 嫌なんだ
…うそだろ
どうしても 沢渡じゃ ないと

…だって お前 ンな事言って
俺のコトなんてすぐ忘れちまうんだろ? さっきだって興味ないとか言って
沢渡――は
沢渡は全然違うだろ
とりつくろいっ
沢渡じゃないと俺………
結構
のぞみあるんじゃねぇか…?
俺――
…ごめん 俺 何か すっげぇ ワガママ 言ってるよな
でも やっぱさ 何つーか… あれ?俺 なに言いたいんだ…?
――ぷッ
な 何 笑ってんだよ
くっくっ
悪ィ悪ィ 自分のコト
おちこみ損だよな ったくよォ
――――心配しなくてもさ
俺のプランなんて
4年分は お前のお守りするって決まってっからさ
言っただろ この前も 慣れてるしって
でも……
それにさ
もう他人にはやりたくねぇし
おもり役
イケてるって わかった以上 絶対な

……何で？
どっちかっつうとせいせいしない？
オレはうれしいケド
なんでって…
うーん コイツには遠回しすぎか？
ーーんじゃヒントな
……？
ヒントってーー？
沢渡…？
ピキーン
ガラ
何だぁ？まだ誰かいるのかァ？
今日は6時完全閉門だぞ もう帰れよッ
バタンッ
撃沈
？
うーーーーす…
沢渡？
……まいっか
俺も年単位かかってるし
へ？
お前なんかあと1年くらいいりそうだしな
何？意味わかんねーよ沢渡
はいはい い ーーから帰る仕たくしろって
ほらカバン持つ！上着着る!!
とりあえず

こいつの傍に いられるなら
なァ さっきの ヒントとかって？
アレなー 自分で 気づけ その方が俺も 嬉しーし
それで十分——
——いや でも ちょっとまて さっさと オトしといた 方がいいのか？
やっぱ根が パッパとやんなきゃ すまないタチ
こいつの場合 一生 気づかねー かも
おわり

# 愛ノコトバ　内田一奈

今時 ラヴレターなんて「バッカじゃねえの」って思った
椎友尚 様
好きです。
あなたが好きです。
四六時中 先輩のそばにいたい。
それが叶うなら 僕はあなたの
奴隷になります。
2-E 村上健次
何だ? 不幸の手紙かぁ?
男相手に チンプな言葉 並べやがって
ホント バッカじゃねえの こいつ——て
2-E 村上健次
あん時 笑い飛ばせれば 迷うことも なかったのにな

内田一奈
うちだかずな
あい
愛シコトバ
『恋は盲目』というけれど、
彼らの場合…!?

友尚さ〜〜〜ん♡
愛しのケンちゃんが呼んでるぞ
急げよ友尚サン♡
殺ス
卒業までの暇つぶしだかんなこれは!
名前で呼ぶなっつーの!
ポカッ
あれ?
小遣い入ったんでおごりますよ椎先輩
……
ね?何食べたいです?

椎
また八宝菜？
姉ちゃんたらバカの一ツ覚えみたいにコレばっか…
かも野菜ばっか
文句言うならもっと稼ぐか玉の輿にでも乗ってちょーだい！
友！ごはんは？
食ってきた
あんたいつから働くんだっけ？
弟にたかるなんてダセー真似やめてソープにでも行けっての！
姉ちゃんらの為に進学締めたわけじゃねぇぜ
椎

何でもっと早く診てくれなかったのよ!?
ホントなら父さん助かったんだからね！
このヤブ医者!!
カチャ
あんたこそその顔で女口説けばお金になるかもよ

くさってんな
ふふっ

あッ椎先輩ッ！
小遣いってコレ……
それより今日は何食べたいです？
―……
これで服でも買ってよパパ
オレ春から社会人だしさ

カチャ
健次
FITTING ROOM
どうスか？先輩…
やれよ
!?
好きなんだろ？
オレのこと
奴隷なんだろ？早くやってみろよ
好きにしていいぜ
ほら

マジかよ…
バッカじゃねーの こいつ……
何でも簡単に従いやがって…
あ…
くさってんな
オレも
おまえなんか卒業したらバイバイだかんな
そ…そんな…っ

椎先輩…ッ
こんな男相手に……
(そのわりに気分出してたけど)
オレは男が好きなわけじゃない
(女にも辟易してるけど…)
ホントおまえバカだよ健次——…
オレの奴隷になっても何の得もないんだぜ?
傷つけられて捨てられて
それでもいいなんておまえ——
第一九回
卒業式

在校生代表
2年F組
村上健次
おめでとうございます
な…何であいつが
あれぇ?
椎ちゃん知ってて付き合ってたんじゃねぇの?
何てったっけ?
国道沿いのデカイ病院あそこの医院長の息子だって?
ケンちゃんてめちゃ頭いいらしいよ
う…嘘だろ…!?
あいつが
これって単なる偶然か…?
親父を殺した医者の息子!?

まさか――……
どうして隠してたんだ!?
好きだとか何とか…男相手に妙だと思ってたんだ
体育倉庫
好きですよちゃんと…
何!?
だけど父さんのこと出したら先輩オレのこと避けたでしょ?
そのことで締めたくなかったんです
避けられるなら殺された方がマシだって思った
だってそれより前から好きだった…初めて学校で見た時からずっと…
そんな言葉信じると思ってんのか!?
…え…?
傷つけていいんだ
親父の罪をおまえがつぐなってくれる
よかったんじゃないか……
そういうことだろ?
先ぱ…

や…っ
痛ッ
でも…や…ッ
このまま……
……
あ…ッ
あッ
健次？
先ぱ
好き…ッ

あ――…
その言葉を
笑い飛ばせてたら
こんな……
罪悪感を
感じずに
すんだのに――…
初めておまえを
見たとき
「覚悟がいるな」って
そう思った
あれから
嘲笑うか
ハマるか
ずっと迷ってる
どう応えていいか
迷ってる……
健次…

ホントに オレで いいのか?
プロポーズ みたいですね
今の言葉——
おわり

その身体にしみ込んだ僕の香りに、
君はとうに縛られている…。
晴れ——。
松居祐規と彼、黒沢義弘は
ありきたりの
男子高の教室内で
ただ　すれ違うだけの
クラスメイトだった。
karin misugi
presents
美杉果林
カレイドスコープ
kaleidoscope

――――んッ
…は
祐規
あっ
ッ
チッ
チッ
チッ
愛してる
――…

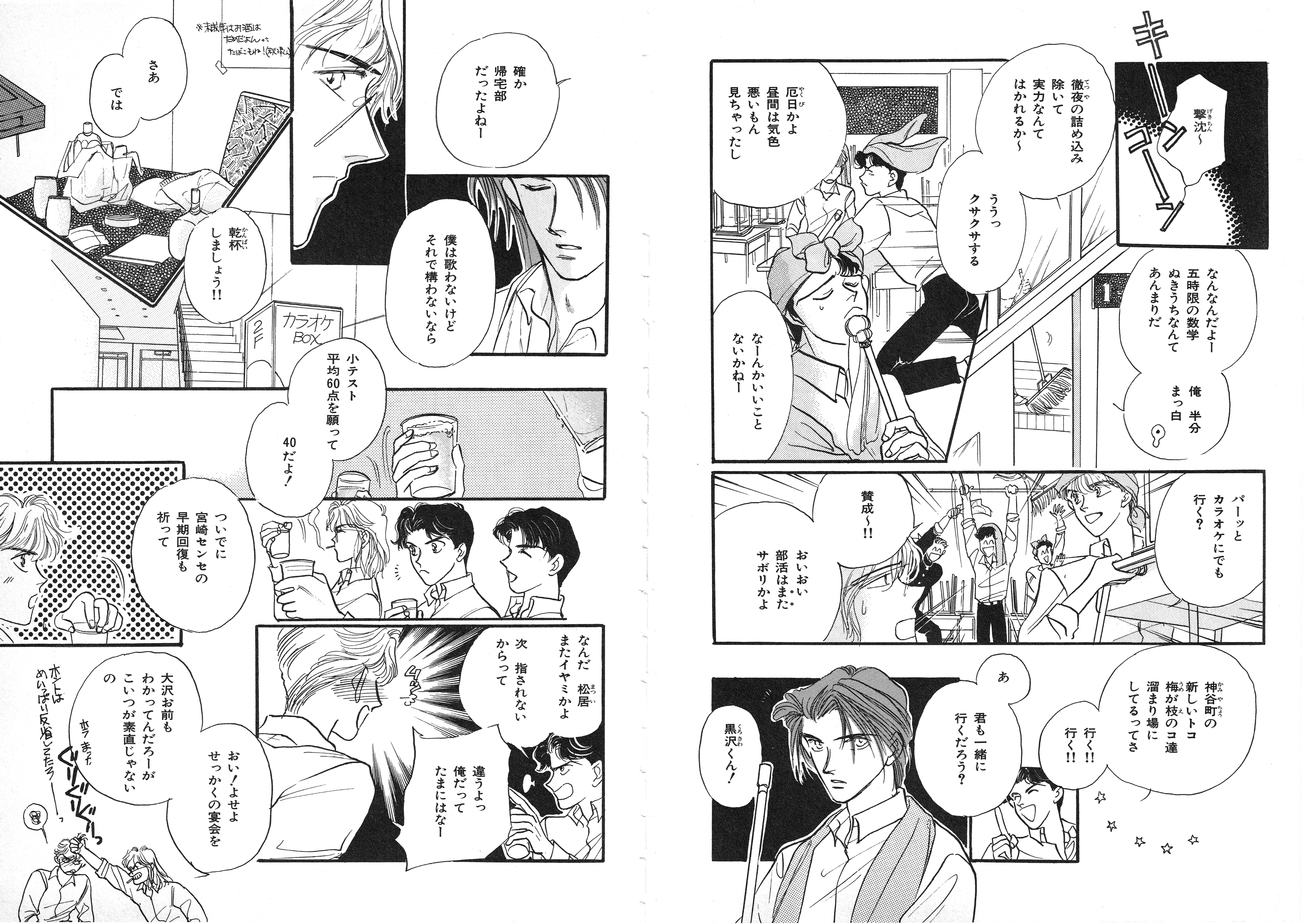
祐規…！
36番 松居
では 次の行から
松居祐規！
欠席だなっ
ガバッ
は はいっ
起きてます!!

ばかもーっ!!!
何をしに学校に来とるんだ！松居!! 大体生活態度がなってない
その赤茶けた脱色頭といい、しかもパーマ！
これは地毛でーす
嘘をつけ 3ヵ月でそう変わるか 腕まくり！ポケットに手！反省の色がないっ
廊下で根性入れて来い!!
ひっひっ
久々出たよなー 宮崎のオステリー
いやー それよりまして 松居クンのボケぶり やってくれますねー。
なぁにが地毛だよ いきなりまっ茶々 外人さんかってーの
大沢てめーなァ じゃあ この秋津のパツ金並の毛は何だ!?
俺は入学と同時だもん。やり方まずいんだよ 松居のは
いいんだよ 義務教育じゃあるまいし
ぎゃははっ
居眠りもスタイルのひとつ？
オステリーの授業で居眠りするくらい夜中何こいてんだ おめーは 情けねーな
要は〝本人のスタイル〟これさ 似合うだろ？
それ、とか？
ぴら
え
カラ
あれほど気をつけろって言ってるのに
なぬー？ この男の園でなんと羨ましいものつけてんだ！
松居てめえっ 根性悪!!
マジか!? ぬけがけは ゆるさーん
誰なんだよ おい 白状しろ どこのコだ!?

梅が枝女子高の2年生
笑うとちょっとアムロみたいな
ちょーナイスな子!!
おお～金のわらじ～
ちきしょー!
あ! 黒沢氏
良かったどこ行ってたんだい
どこってちょっと疑問点を
おおでは完璧版翻訳ノート!
悪いけど貸してくれないかな
あっ秋津ダメ! 俺のが先
ぜーったい宮崎のヤツ次一番で俺指すもん!
おしのきっ
だろ? 黒沢、なっ
あ ああ
おっ!! すげえ随分先まで訳してあるじゃん
ラッキー♪
今度お礼に俺が指圧でも肩揉みでも何でもしてやるよ なっ
いいよ別に
何だ 松居! 近頃「肩揉め」って言わないと思ったら
さては おとなしい黒沢君を按摩代わりにしてるな
心身共に爽快～
このきもちっ
いっひっひっ上手なんだぜ黒沢氏は心得があって
いやー しかしいつのまに
あんな黒沢なんて教室の隅っこで地味～にしててノート取ってるだけの暗い奴
ああいう奴なら何頼んでも断られずに済みそうだもんな
肩揉みついでにノートもコピらせてもらってるんじゃね?
いえてるー 松居の奴腹ぐろ～い
しかも女までいる 許せえ～ん
ガーン
うおうっ!!

なんだ ケンカ?
ちっ見えねえな 上からじゃ
――事故?
しっかりして下さいっ 大丈夫ですか!?
そっと! うごかしちゃだめだ!!
う
見世物じゃないぞ!! おまえら
始業チャイムはとうに鳴ったぞ!! 教室へ戻れ
げ…っ
大丈夫ですか!? 宮崎先生!!
もうすぐ救急車が来ますから
あ
あし…

足が…勝手に動…! いっ……
宮崎先生!
喋らないで下さい 先生
俺のからだど…なって ……急に
ピーポーピーポー
血みどろ~
スプラッタだよ 後味悪る~
全治3週間だってさ
気の毒に
老ボケかな 体きかない なんて
ふ~~~ん 日頃の行いが悪いからだろ
見てないから あんなこと言えるんだよ
額パックリ 裂けて 悲惨だったぜー
松居!!
いくら宮崎に恨みがあるからって
ケガ人に それはないだろ!
へーへー 反省 反省!!
松居 おのれはー


キーンコーン
撃沈～
徹夜の詰め込み除いて実力なんてはかれるか～
うう クサクサする
厄日かよ 昼間は気色悪いもん見ちゃったし
なんなんだよー 五時限の数学ぬきうちなんてあんまりだ
俺 半分まっ白
なーんかいいことないかねー
パーッとカラオケにでも行く?
賛成～!!
おいおい 部活はまたサボリかよ
神谷町の新しいトコ 梅が枝のコ達 溜まり場にしてるってさ
行く!! 行く!!
あ
君も一緒に行くだろう?
黒沢くん!
確か帰宅部だったよねー
僕は歌わないけど それで構わないなら
※未成年はお酒はだめだよん。たばこもね!(秋津ム)
さあ では
乾杯しましょう!!
2F
カラオケBOX
小テスト平均60点を願って
40だよ!
ついでに宮崎センセの早期回復も祈って
なんだ 松居 またイヤミかよ
次 指されないからって
違うよっ 俺だってたまにはなー
おい!よせよ せっかくの宴会を
大沢お前もわかってんだろーが こいつが素直じゃないの
ホラまった
ぐりぐりぐりっ
ホントはめいっぱい反省してたろーーっ

松居クンはほんとはすっごくかわいい性格なのなっ？
ぱし！
おりこう！
てめーに言われたかねーやジジィ秋津！
ホラ 照れる
るっせー!!
ドッ
で、もういいのかい？飲み始めても
……！
乾杯の音頭終わったんだろ手持ち無沙汰なんだけど
あ、
ああもちろんどうぞ!!
ごめんよ黒沢くん内輪で悪のりしちまって
なんだよーあんなの誘ってシラけるなー
しかもウーロン茶ー
大沢ァ
頭数揃えたかったの！ここチャージ高いし
ひそ
ひそ

こらこら
ま 酒タバコやってるこちらの方が悪いって言えば悪いんだけどな
73の216セット、と
黒沢ァおまえは？
ホントいいの？もったいねー
ピッ
次つぎ！俺!!
まぁた大沢かよカラオケの悪魔～
やんや
やんや

わははわはっ
は
たまにはひっこめー
俺のマイクだー
あれ松居ったら
もうつぶれちゃってる
ヨッパライです情けないです!!
弱ぇんだからかっこつけて飲むなってんのによ
仕方ねぇなあ
黒沢くん重いだろう?
たたき起こそうぜこの眠りん坊
僕は大丈夫このままで
でもよどうすんだ?こいつの面倒
僕はしらふだし送って帰るよ

じゃあな気ぃつけてなー
ヨロシクなー
言葉悪いけど助かっちまったな
何だかんだと役に立つ黒沢くんってとてもヨイひと
あっ
そういや松居ん家知ってんのかな黒沢氏
あ〜〜〜
…やっぱ居ないか
ま、何とかなるでショ

ギくっ
カチ
――!!
松…居!?
……

すっ
!
秋津!
ここ 学校
タバコは
まずいよ
あ、
ああ
ふ
サエないねー
朝からため息
ばっか
――
本庄、おまえさ
ん?
もし、仮に
つきあってる奴が
いたとして
っはよー!!

ようよう シケた顔
飲み過ぎかー？
それは おまえだろ！ バカッ
で？ 秋津 なに？
やっぱ いいよ 何でもない
梅が枝のコなんて 一人も居なかったな そーいえば
大沢の 大うそつっき
松居は彼女 いるんだから 関係ないだろが
ナンパは また別なの
余計なお世話って もんだよな
誰が誰と つきあってようと どういう関係か なんてこと
エゲツねー この不埒もん
う—— らしくねえ 何がこんなに つっかかるんだろ
野郎同士だろうと ふだん気に ならないのに
松居と黒沢… あまりにも 異質で

やっぱり 腑に落ちない
どっちがカモフラージュなんかな—— なんてな—
えー 長距離ィ!?
日頃のなまりに 喝を入れる
タイムも測るから そのつもりで
マジかよ 俺きのう 殆ど寝てねえのに ぶっ倒れるぜ
バカハゲめー クッソォー
2キロ
と思っていたが2組は 倍、トラック10周 4キロで測定する
こんなの 進学校の 授業かよー!?
全力で走れよ おまえらの中間テストだ 成績につける！
えええーっ
きったねえーっ

たったっ
ゼーーッ ハーーッ
きつく〜
ハーーッ
口きく元気があるならスピードあげろ！
ゲエッオニ！しごきハゲ!!
スパルタめー教育委員会に訴えたる！
秋津のやつヤニ喰いのくせに速えでやんの！
あのラフなフォームで
にくいーもう半周差？
松居もだぜタフー！
あちー
まくれまくれーーッ
きさまら
ま
松居!!
!!
ドサッ!
おいっしっかりしろ
ばっかやろう理由になんねえぞ二日酔いなんて
どうした大丈夫か
おい
…！

貧血か？
ええ 少し調子も 悪かったみたい ですし
保健室まで 連れて行きま しょう
俺も 立ち止まっちゃい ましたから
大丈夫かよ あいつ
しゃーねーなあ
付き合いいいなー 秋津ってばよー
死んでらー
ハルコせんせーっ すみませーん
どうしたの Wブリーチズ！ リタイア？ サボリなら ベッドはだめよ
ちがいますよー
これ これ！
重症なの 横にさせてといて 下さい
——あら、ケガ？
秋津くん
ちょっと

その、彼は日頃どういう感じなの？
松居くんですか？フツーの元気な明るいやつですよ
頭とか染めてるようだけど そんなことで例えば、
上級生、他校の生徒とかに暴力振るわれるなんてことは？
いえ そういうことは
何か？
――ケガ
出血してるのよ その…
あんな状態でマラソンなんてとても考えられないのに
ケガ？
えっ 松居朝は絶好調でとばしてたのに
どこにケガなんて
…これはプライベートな問題だから…
……
目を覚ましたようね 鎮痛剤を飲ませるから起こしてあげてて
それと さりげなく さっきの先生の言ったこと聞いてみて？
松居
大丈夫か？
あ…きつぅ
熱でて来ちゃったみたいだな
泣く程つらいのか？今ハルコ先生が薬持ってきてくれるよ
〜〜〜
な、もう少しだ我慢しな
松居
なんで…
なんで？俺どっか悪いんじゃ
ヘンだよこんな…！
きゃ

ハルコ先生!?
…黒沢
おまえ何したんだ?
何も 眠らせた だけ
祐、松居くん なか?
ばしっ
答えに なってない 黒沢!
先生は!? 松居をどうする つもりなんだ
別に どうもしない 痛みを封じて あげるだけだ
そんなこと できるって いうのか?
――こっちだね
肩の力ぬいて いいかい?
もう、痛く ないよ
息を吸って
ゆっくり 体の力が 抜けてくる

すっ
ぱ
どういうつもりなんだ 黒沢
宮崎のケガ、あれも おまえなんだろう？
催眠状態にして
相手を思う通りにして

松居も
そうだろう？ 同じ手口なんだろう？
カラオケ屋の帰り 悪いと思ったけど
見ちまったよ ──おまえたちの
けど、あれを 松居は 知らないんだ？
秋津 おまえみたいに
人好きのする 器用なヤツには わからない
わからないね その 出血するくらい いくら記憶消して わからなくしてる からって あんまりじゃないか 松居が可哀相だ
そうだね 正気の彼は 僕のことを 視界の隅にも 入れないだろう
予習ノートや 何らかの利点を 僕に見出す 以外には
それで いい 偽りごとのままで
離したくない

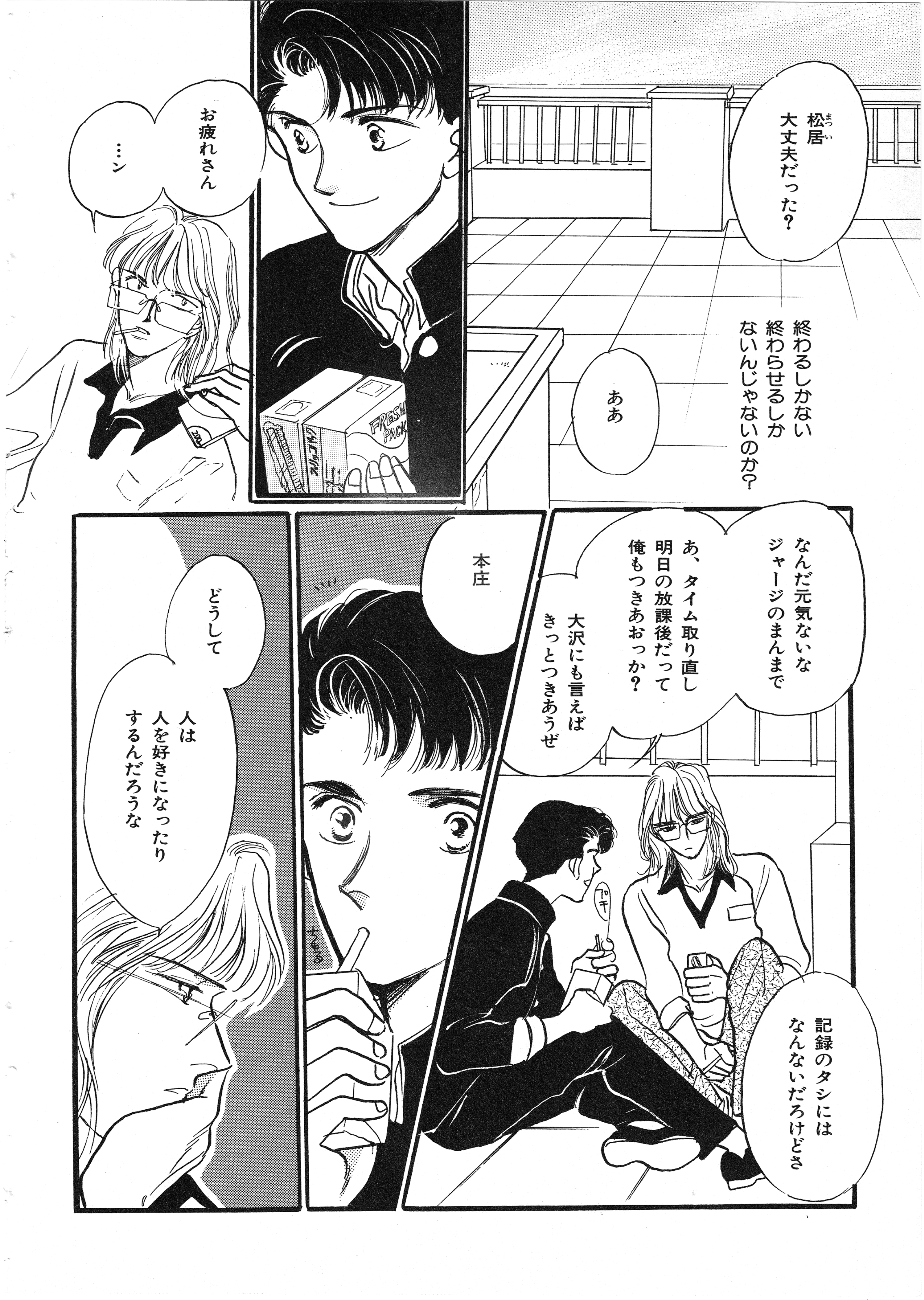
それじゃ
つらいだけだ
何にもならない
そのままじゃ
終わってしまう
だけだよ
ちがうだろう?
どうしてもっと
大切にしてあげない?
たとえば
はじめて会った時、
好きだと気付いた
時とかの
やさしいきもちで
はじめ?
はじめて祐規を
知ったのは 僕が
指される筈の授業で
あらかじめ予習した
ノートを勝手に
持っていったんだ
そしてそのまま
返し忘れて
とくに
謝るでも
なくて
「こんなに
調べて来たのに
覚えてないんだ」
ってね
答えられずに
立たされた僕を
笑って見てた

気安く
呼び捨てにして
肩揉めだの
勝手なことばかり
人を利用して
手に負えない
傍若無人さで
僕には接してきた
それは
あいつは悪気
あってのことじゃ…
けど…
だからだって
いうのか…?
ちょっとした
好奇心と
おかえしの
つもりだった
叔父が精神科医を
やっていてね
聞きかじりの催眠術を
試してみたかった
人間って
おもしろいくらい
暗示にかかり
やすいんだよね
でも、そのときの
感覚はあるんだ
祐規がどんな顔
してみせると思う?

最低だって
軽蔑するかい？
だからはじめから
優しくしてあげたい
なんてきもちに
なったことなんか
ないんだ
むしろ　ただ
今あるのは
独占欲だけ
今は
僕のものだ
渡すつもり
なんかない
でも　松居が
好きなのは
彼女なんだ
黒沢、
おまえじゃなくて
松居には
彼女がいるんだぜ
？
聞いてただろう
梅女の
こんなこと
虚しいだけだ
幻影に捕らわれて
夢を見ているのと
同じなんだ黒沢！
目覚めたら
キズつくだけだ
きみも、松居も！
そうだね
ショックだろうね
真実のことを
知ったら
こんなこと
されてると
わかったなら
傷つけるのは
僕――？
それとも
秋津、
君が？
祐規を
守ってあげたい？
なら
そのお優しい心遣いで
君が祐規に真実を
伝えればいい
そして　君が
祐規に知らないで
いた方が
まだよかったのにと
思い知らせるんだ
黒…沢！
先生達みたいに
同じ方法で
忘れさせて
やってもいい
けれど
全てに如才なく
何でも思うまま
こなす君が
秋津、
他人様まで
救おうと言うのなら

君の言うところの
きれいごとや
上手なやり方とやらで
僕達を裁けばいいんだ
僕は彼を
手離すつもり
なんかない
……なァ
黒沢

好きだから
なんだよな?
なぁ?
おまえの瞳は
松居だけを
みつめてる
けれど
わからない
そういうものなのか?
黒沢
傷つけるだけ
傷つくだけ
そんな恋の行方は
あ!いたいた
やっぱここか


松居(まつい)
大丈夫だった?
終わるしかない
終わらせるしか
ないんじゃないのか?
ああ
お疲れさん
…ン
なんだ元気ないな
ジャージのまんまで
あ、タイム取り直し
明日の放課後だって
俺もつきあおっか?
大沢にも言えば
きっとつきあうぜ
本庄
どうして
人は
人を好きになったり
するんだろうな
記録のタシには
なんないだろけどさ

どうしてって
ひとりじゃ
さびしいから
——?
……
かあっ
ああっ
なんだい
秋津!
からかってん
だな!!もうっ
——!?
秋津?
おもいよ
悪い…
このまま
肩かしといて
くんない?

おわり

# 好きなものは好き♡

## ◎GIVE YOUR LETTER◎

恋の基本形は〝学園〟にアリ!!　ひと気の無い特別教室やグランドの片スミ、ギシギシと音をたてる渡り廊下には、矢をかまえたキューピットがじっとアナタを待ってるかもよ♡

### Zips＝（イコール）ピュッ

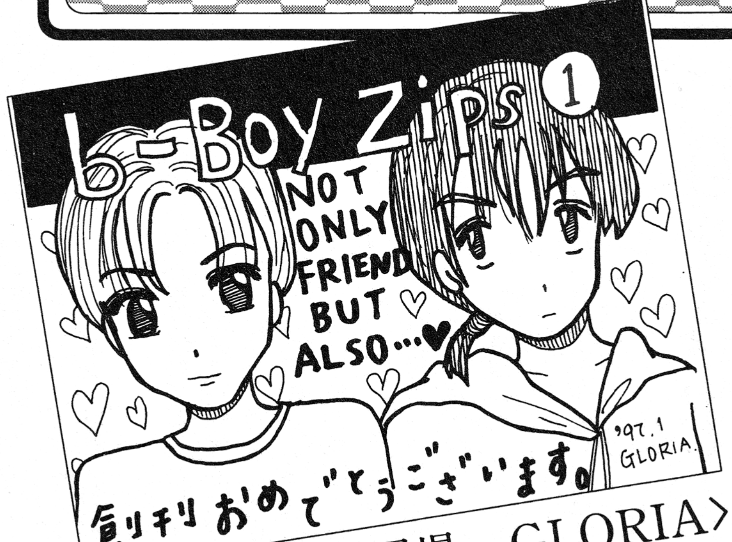
新しくなるんですね。Zips。辞書をひいたら元気とか勢いよくやるとかぴゅっと音を立てるって出てて、なんかいやらしいぞ、ビブロス!!って思っちゃいました。

（茨城県　カレン）

今度から「b－BOY」じゃなくなるのですね。何故なんですかね!?　セッカク㉚巻も続いたのに…。だからと言って私は買わないことはないですけれども♡これからもバンバンHを…いやいや素敵な男の子達を…お願いします。（Hも…💧）それよりもお聞きしたいのですが、この「b－BOY」は〝成人指定本〟なのですか？　この本を買おうと本屋に行ったら袋に入ってて『成人指定なので未成年の方はご遠慮下さい』と書いた紙が入っていました。

（神奈川県　真耶）

いきなり何をおっしゃいますやら。〝成人指定〟の本を、平均年齢17才の私たちが作れるはずありませんでしょ




〈福岡県　GLORIA〉

### 数々の障害…でも好き

約30分かけて本屋に到着!!　そしてステキな表紙にぽ――っとなりながらも手にとろうとした瞬間「う〜ん、新しい問題集出てるんならそれも欲しいな〜」と、どっかで聞ーたことのある声がっ!!　おそるおそる振り返るとそこにはウチの学校の音楽担当の先生（女）が小学生の息子（らしき人物）と一緒にお勉強のワークをなかよく選んでいる姿が!!　私はスバヤクこの本

〈大阪府　杜　芳樹〉

を手にレジへダッシュした。「先生お願い!! 私に気づかないでぇ～」と心の中で叫んだにもかかわらず、結局は目が合ってしまった。とっさに一礼して逃げよーとしたのに、先生はニコニコしながら寄って来て「あら? 何買ったの? マンガ?」わたしは「い、いえ数学の参考書です」店員さん「……。」(笑いをこらえている)

(北海道　こはらゆうか)

やおいマンガを保管するスペースがとうとう無くなってしまったのでお義父さん(私は2児の母)に本棚を作ってもらいました。無駄なく収納出来るように棚板の高さもきっちり測って仕切ったのでコミックスを並べたらズラリとすごーい迫力です。ビーボーイコミックスは先生ごとに表紙の色違うから色とりどりで〃ぷりちー&びゅりほー〃なんだけど、b-BOYシリーズは背表紙に「HARD PLAY」だの「SM」だの書いてあるもんだから手前に料理のレシピ本をさりげなーく置いちゃった♡　ここにb-BOY Zipsが入るのが楽しみ!! スペースあけて期待して待ってますよ♪(何も知らずに嬉しそーに本棚作ってくれたお義父さん…ごめんなさい…)

(東京都　Mao Mao)

大変な思いをしながらも、愛して下さってる皆さん、ありがとう♡

## さすが読者サマ

〃ゆうれい特集〃をお願いします。見えないモノに犯られてしまうなんてドキドキします。

(東京都　スズキミホ)

今度援助交際ものとかして下さい。たとえば中高生のかわいい男の子が援助交際をする。その相手は学校の先生とか義兄弟でどうでしょうか? 私は楽しいと思います。

(山口県　聖)

私は以前、看護婦をしていたので、ぜひ病院関係の特集をして下さい。先生同士、先生と看護士、検査技士、理学療法士。人体のことを知っている人達ばかりなので㊙はおいしいに違いない。包帯で縛って消毒液で消毒(どこをだ!)して、注射器で…。

(三重県　カナック)

愛には色々な形がある。もちろんや○いにも

## ハマッテ ハマッテー!

初めて買ったんですが(友人にすすめられて)レジの方へ持って行ったら店員さんが本をパラパラっとめくって私の顔をジーッて見つめてるぅ。〃なにっ? どんな内容の本なんだっ?〃って思ったら、こういう内容だったんですね。でも好き。ハマリそうです♡

(大阪府　羽柴　愁)

年がいもなくこの傾向にはまってしまいました。やはり大人の男同士の恋物語が好きです。社会的な規制とかある中でどうやって本当の恋にめぐり会えるか、どう育てていくか、あるいはどう壊れるのか…そんなストーリを読みたい。仕事に燃える男はかっこいい!と思う。

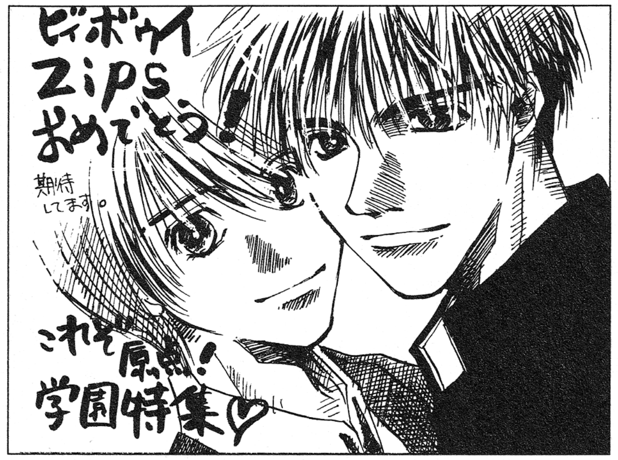
(福岡県　高木仁美)

◎GIVE YOUR LETTER◎

「ゲホッゲホッ○○印刷の…ゲホッ…△△です…ゲホゲホッ…」このゲホッで火を吐いている△△さん、超カッコイイっす。あつ髪コゲてます

最近好きな人ができました。会社の部署は違うけど先輩で、一緒に仕事する事があって僕に「彼女いるの?」と聞いてきたので「いないですよ」と答えたら、「そうだよねー。俺がいるから彼女なんかいらないよねー」と言われてしまいました。それからというもの、けっこう仲良しです(いろんな意味で)。だけどまだ「好き」と言ってくれないので不安です。

(山梨県　帽子)




〈東京都　寿さくら〉

いいなー普通の恋してる…けどよく読むと男同士!? つまり彼らはホモ

## 君の弟にカンパイ(完敗)

この前とんでもないものを聞いてしまった。それは何と男の子の〃あえぎ声〃です。弟の友達(小6)が私の家の玄関で「アーン」や「アハーン♡」などと言っていて　私は食べていたパンをポトリと落してしまった。ただ単にふざけていたみたいだがまんざら冗談じゃなかったぞ。

(大阪府　北村めぐみ)

今後もチェックよろしく♡

## ズバリ

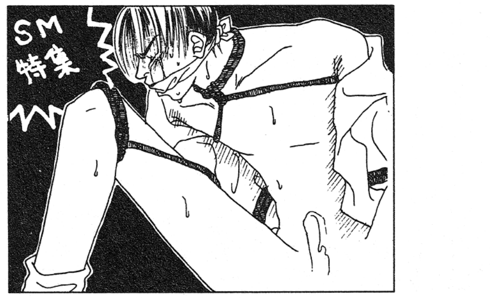
あの…質問なんですが…なぜこの手のマンガのマンションは一緒なんですか?　というのもよく「おれん家(マンション)行く?」と言って、描いてあるマンションがいつも同じなんです。なぜ?　おしえてー!

(大阪府　関西のホモ好き少女A)

全ての人や物は異次元でつながっている…というわけで次回は貴方を異次元まで飛び立たせてくれるハゲシ～イ愛『激愛特集』!! GET YOU!

# お兄さまにお聞き

**ボンソワール、マドモアゼル♡僕は人もうらやむパリジャンのピエールさ。これからこのコーナーで皆と愛を語るよ。もちろん質問も受けつけてるから、君のステキなハガキ待ってるよ、ジュテ～～～ム。**



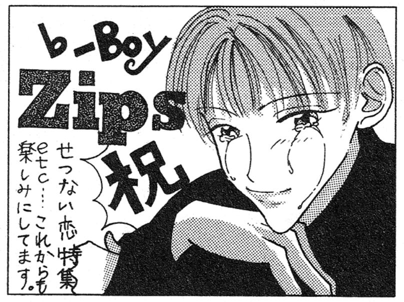

僕の妹は全寮制の学校にいるんだ。あまり会えなくて寂しいけど、毎週必ず手紙をくれるんだ。先週は『女同士でどうやるの?』なんていうちょっと困った質問をしてきたけれど、可愛い妹のために、友達の孔明の指先(仮名)に聞いてあげたよ。さあ、乙女諸君もこの世の楽園にモナム～ル♡

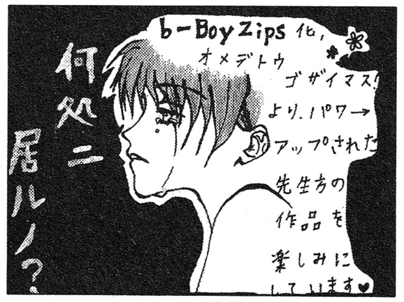
女同士でどうやるの? ですけど、あなたのいけないお口と手があればOK。(器具なんてNON) あなたのテクニックで昇天させてあげてください。自分自身はですね、彼女の足をはさんで○○と□□□で感じることができるんですよ。(そして彼女の切なげな顔) 普通のSEXとはまた違った快感です。でも一番大切なのは愛ですよ、もちろん。

(福岡県　孔明の指先)

僕は男なので女性同士の愛し合い方は分からなかったけど、聞いてみると実にシンプルかつイヤラシイ方法だね。なんともはや。器具はNONということだけど、もし使いたかったら遠慮なくお言い。僕も持っているからいつでもおくってあげるよ。

**巨匠拝見**　今号のテーマ…涙ぐむ美少年の図



# COMIC REVIEW

b-BOYは雑誌と違ってずっと書店に並ぶから、データが古くなるので、誌代や送料を載せていません。ごめんね。でも頑張って素敵な本をみつけようね!!

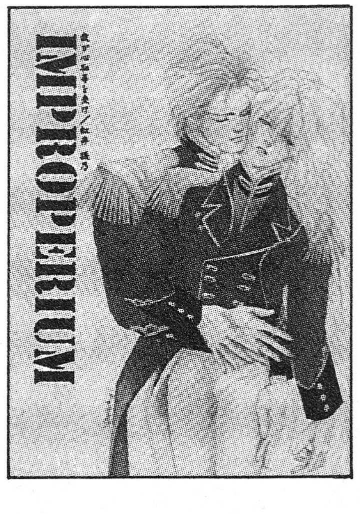
## アダルト 巨人の星

（1996・12・29）●44P▼B5

発行／トバエ内「梶原プロ」
連絡先／埼玉県所沢市和ヶ原1の229の2青木ハイツ101（〒359）
篠田 直美

'96年夏コミの話題を独占した「元祖・巨人の星」に続く、超意欲作!!梶原ノボル（鳥人ヒロミ）が精魂込めて描き上げた、超ハンサム花形×セクシー飛雄馬のHは袋とじ!（ドキドキ♡）ギャグ+企画ページも読みごたえ抜群で、大満足まちがいナシ! 前作と合わせて読めば、貴女のハートも大炎上しちゃいます!!

## IMPROPERIUM




（1996・12・28）●86P▼B5

発行／AT&T 紅井事務所
連絡先／神奈川県大和市柳橋1の8の3の105（〒242）
CO. AT&T 紅井採乃

紅井採乃のガンダムW本とくればもちろん、華麗で激愛なトレーズ×ゼクス!!あの装飾過多なご衣装もバッチリはまって画面はまぶし〜!哀しければ哀しい程美しい2人の愛は、何をもって昇華されるのか…胸を打つストーリーが展開。ゲストの篠崎まあるの小説、また巻末の辛口のガンダム論など盛りだくさんです!

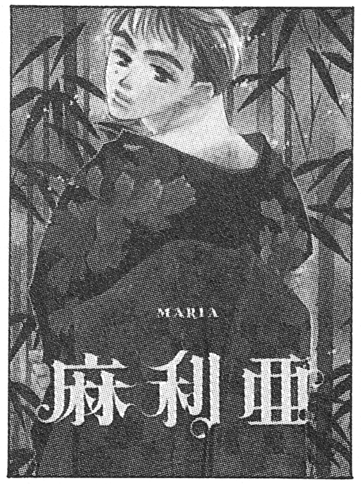
## COCO JAM

（1996・12・28）●42P▼A4

発行／PINK JAM
連絡先／東京都板橋区四葉2の9の8カーサメディオ308号（〒175）
山田 宗隆

マガビーでおなじみの亘理なおみが大人気の「ときめきメモリアル」に挑戦!! カワイイ女の子がわんさかわんさか出てくる超キュートな一冊です。かっとばしたギャグもきまってて、女の子が読んでも十分に面白い!! 直野儚羅ほか豪華メンバーで送る、ときめきワールドへ是非♡♡

## 麻利亜

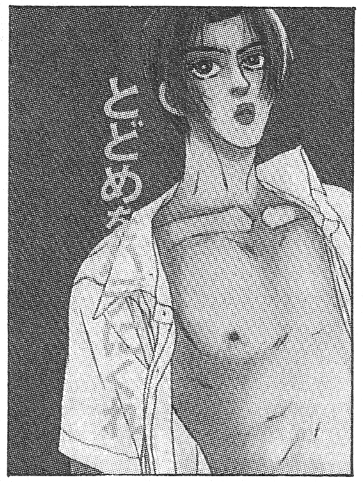



（1996・12・28）●114P▼A5

発行／NO&MONCHITCHI
連絡先／神奈川県川崎市川崎区四谷下町23の22（〒210）
庭山 香織

門地かおりと、大出なつみによるプロ野球本!! 達川×大野がメインですが、完全オリジナルとしても楽しめるハイレベルな長編二本で構成されています。終戦真近のフィリピンで死の影を感じながら、彼と過ごした時間に思いはめぐる──。クラッシック&ロマンチックなムード満点の一冊です。

## とどめをハデにくれ



（1996・12・29）●144P▼A5

発行／アパッチ籠球団
連絡先／広島県福山市東桜町6の1（〒720）
花本江利子

ナイーブでワガママで甘えん坊で、ギューっと抱きしめたくなる程かわいくて（ハッ三井の魅力を表現するだけで2行も使ってしまった）…と語シスコの描く三井は本当にス・テ・キ♡そして彼を落とすのはアノ赤木!!2人の高校一年生時代は熱くてセンシティブ。ガンバッてHする姿も青くていいカンジですよ!

## オフィスの探偵

（1996・10・10）●42P▼A5

発行／あかねブランド
連絡先／愛知県江南市東野南川原66（〒483）
菊谷千絵

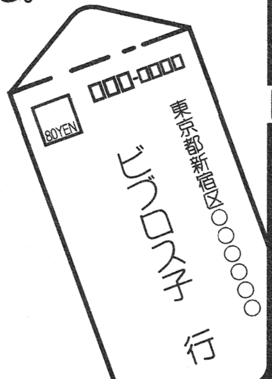
今号でステキな小説を発表してくれた皇極あかねのオリジナル個人誌。ガラリと雰囲気の変わったサラリーマン・ストーリーは、大人のドキドキを届けてくれます♡熱血社員の荒木には気になる存在がいる。それは最近派遣されて来たエンジニアの藤代。しかし彼には何か隠している事があるような素振りで…!?

※注）同人誌データは'97年2月現在のものです。
通販希望の方はまずサークルにお問い合わせ下さい。その時、返信用封筒（80円切手を貼って住所・氏名を書いたもの）もお忘れなく!

# 通信販売の手引き

**※本誌掲載の同人誌は、個人出版物です。当社の発行物とは異なりますので、編集部への問い合わせは、御遠慮下さい。**
**同人誌のお申し込み、お問い合わせは下記を参考の上お願いします。**

サークルへ欲しい本の在庫を手紙で確認する。その時，自分の住所，氏名を表書きし，切手を貼った封筒（長型4号）を同封する。

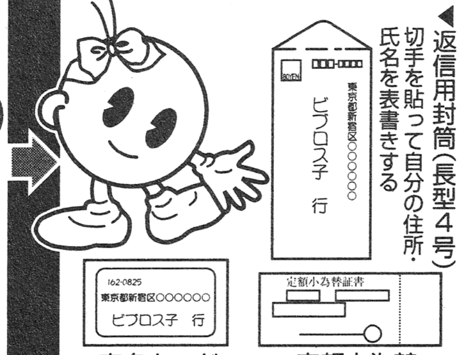



切手を貼った返信用封筒（長型4号サイズ）表書きは耐水性のインクで書いてね。

サークルから在庫確認の返信があったら…。サークルによって申し込み方法が違うので，そのサークルの指示に従って手続きをする。

※定額小為替・普通為替などの郵便為替については郵便局で聞いてね。

これだけを同封し，どの本が何冊欲しいかを手紙に書いて，サークルへ送る。




◀返信用封筒（長型4号）切手を貼って自分の住所・氏名を表書きする

▲宛名カード　裏面がシールになっているのがベスト

▲定額小為替　サークルによって異なる

〈無記名小為替について〉
　無記名小為替とは、定額小為替に何も記入していない状態を言います。受取人指定欄や受取人の住所、氏名は、何も記入しないで下さい。間違って記入してしまった場合は、その為替を持って郵便局で再交付してもらって下さい。ほとんどのサークルさんが無記名小為替での受付になっていますので、間違えないようにお願いします。

# 編集部からのお願い

　ビブロス編集部では、オリジナルからアニパロまで様々なジャンルの同人誌を募集しています。集まった本の中で面白いものは、同人誌紹介コーナーにて紹介し、最高!!感動!!と思った作品は、"b-BOY Zips" "b-BOY ぷち" 誌上などに掲載させて頂きます。

●送って頂く封筒の裏には、赤でジャンルを明記して下さい。
●代表者の住所、氏名、P・N、電話番号、〈連絡がとれる時間帯〉を書き添えて下さい。

**送り先**
〒162-0825　東京都新宿区神楽坂6-46
ローベル神楽坂ビル7F
(株)ビブロス　第一編集部

## ファンレター募集

**今回ステキな作品を描いて(書いて)くれた先生方に、感想＆はげましのお便りを下さい♡**

**あて先**
〒162-0825
東京都新宿区神楽坂
6-46 ローベル神楽坂ビル7F
(株)ビブロス 気付
○○○○○先生

CUTE♥ラブ
よみきり
32P
はじめは、ちょっとした
好奇心(デキゴコロ)で…!?
ぼくがオトナになっても
果桃(かも)なばこ
kamonabako
果桃先生の作品は
『b—Boy㉘・㉙』でも読めるよ。

ただいまーっ
千波矢兄ちゃん起きてる!?
ぐぅぐぅ
バタン
ん――……
のしっ
一日中ゴロゴロしてないでさあ遊ぼ――よ♡
面白いこと考えたんだ
ぐえっ
規格外のデカさでジャレてくるなあっ
俺を殺す気か!?
千人!!
俺の休日をジャマすんなよっ
中学はまだ学校あるだろ
今日から短縮授業になったんだもん

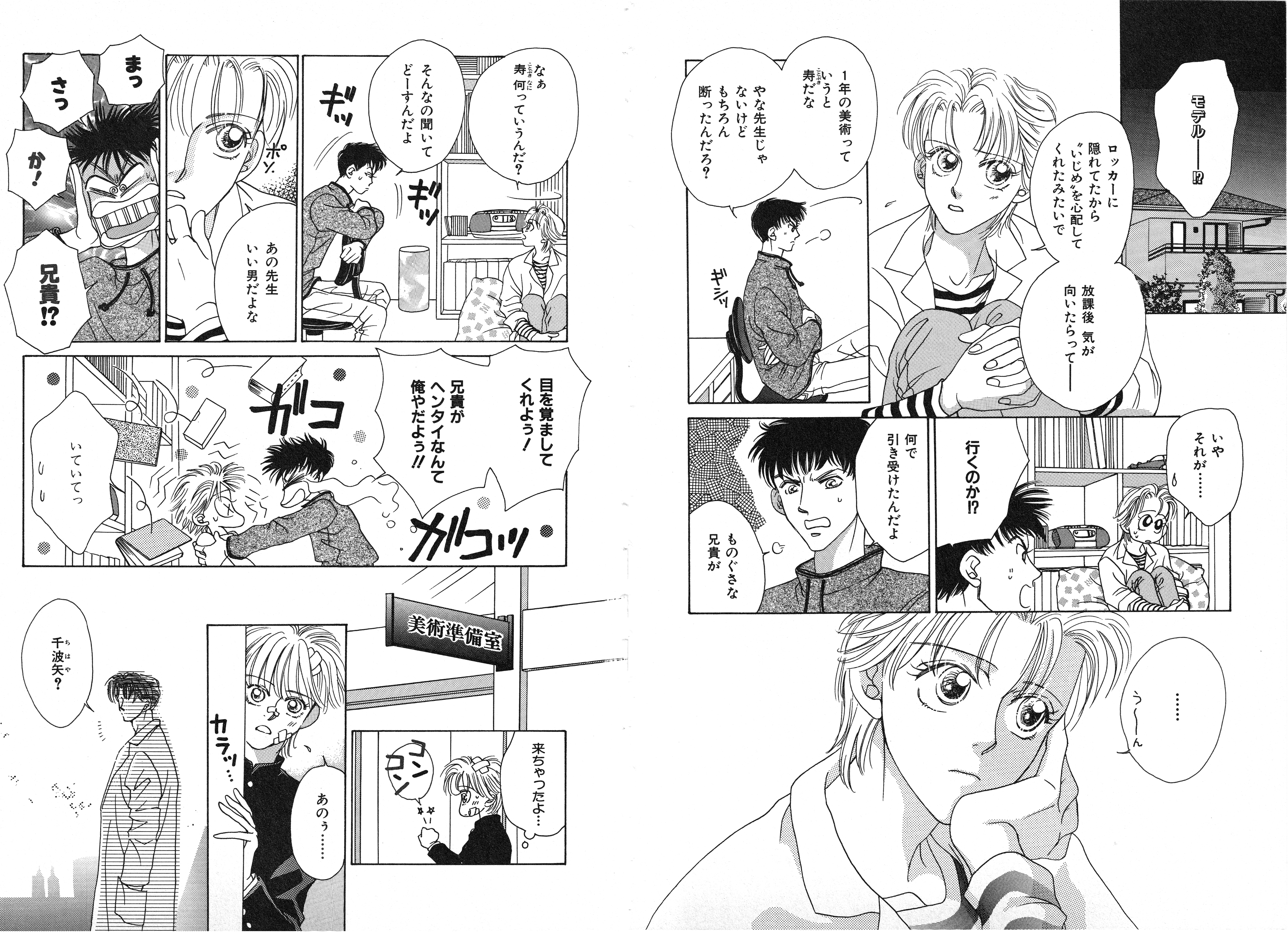
カケ!?
兄貴の中学時代の制服あるじゃん
178cm
パリ
あれ使って潜り込むバレなきゃ兄貴の勝ち
153cm
俺もうすぐ大学生だぞ?
でーじょーぶ俺よからしいよ♡
図体ばっかデカくてまだまだ子供だよなー お前
ふぅ
まいいかつきあってやるよ
ヒマだしね
あふ…
ねむい
じゃ俺が勝ったら今週中の宿題やってよね
へいへい
母校でも結構緊張するなぁ
学ランなんて久し振りで苦しいし
ふーっ
前髪下ろしてみた
高校は私服だった

ちょっと借りるよ〜
ポソッ
おジャマしま〜す…
キョロ キョロッ
キュッ
うわ……
なつかしーなぁ…
えーと 何だっけ
〝図書館で本借りる〟〝美術室の『今月の絵』を調べ〟て――
「今月の絵」なんてやってんのかぃ
まだある あの足跡!
一体誰がぃ
美術室
んーと『今月の絵』は…
どこにあるんだぃ
バタバタ…
ここになけりゃあきらめだな
う〜ん
!
あ あったぞ これだろ?
うん サンキュー♡ 良かった――! これで課題が出来上がるよ
もう 失くすなよ
気をつけますぅ
パタン
ガラッ
行った…かな…?
シーン…

つい
隠れちゃったよ
…ったく…
制服汚したら
母さん
怒るよな……
フワッ
ギクッ
い…今の
感触は…
ぽと。
ぎゃあああああっ
ガターン
ガラッ
!?
どうした!?
やだーっ
やだーっ
うわーっ
ク・クモ
クモクモクモッ
だめ!俺…!
落ち着きなさい
今取ってあげる
から
ぽて。
ほら

大丈夫
もういないよ
よしよし
はぁ
はっ
す すみませんっ
パッ
うわ…っ
男前ーー!

もう 落ちついた?
は はい すみません さわいじゃって…
はずかし〜〜〜
あんまり長くいて バレないかな……
そわ そわ
早く帰りたい?
くす
い…いえっ
君2年だろ? 俺は1年担当 だから なじみ薄いかな
上ばき青だから
2年何組? 名前は?
えっ…
…テキトーに 答えていいかな…
〜〜〜〜
でもウソがバレる 可能性もあるし
じゃあ 何て呼べば いい?
ち… 千波矢
千波矢、か
な どうして 掃除ロッカーに 隠れてたんだ?
特に理由は…
そう ちょっと ふざけてて——
——そう
それなら いいんだ
俺 もう帰ります コーヒー ごちそうさまでした
ん
気をつけて 帰りなさい
カタン
ガラ
ああ そうだ 千波矢
ギクッ
は…はい?
君 モデルを やる気ないか?


モデル——!?
ロッカーに隠れてたから"いじめ"を心配してくれたみたいで
放課後 気が向いたらって——
1年の美術っていうと寿だな
やな先生じゃないけどもちろん断ったんだろ?
ギシッ
いやそれが……
行くのか!?
何で引き受けたんだよ
ものぐさな兄貴が
……
う〜ん
なぁ寿何っていうんだ?
ギッ
ギッ
そんなの聞いてどーすんだよ
ポン
あの先生いい男だよな
まっ
さっ
か!
兄貴!?
目を覚ましてくれよう!
兄貴がヘンタイなんて俺やだよう!!
ガコ
カコッ
いていてっ
美術準備室
来ちゃったよ…
コンコン
カラッ…
あのう……
千波矢?

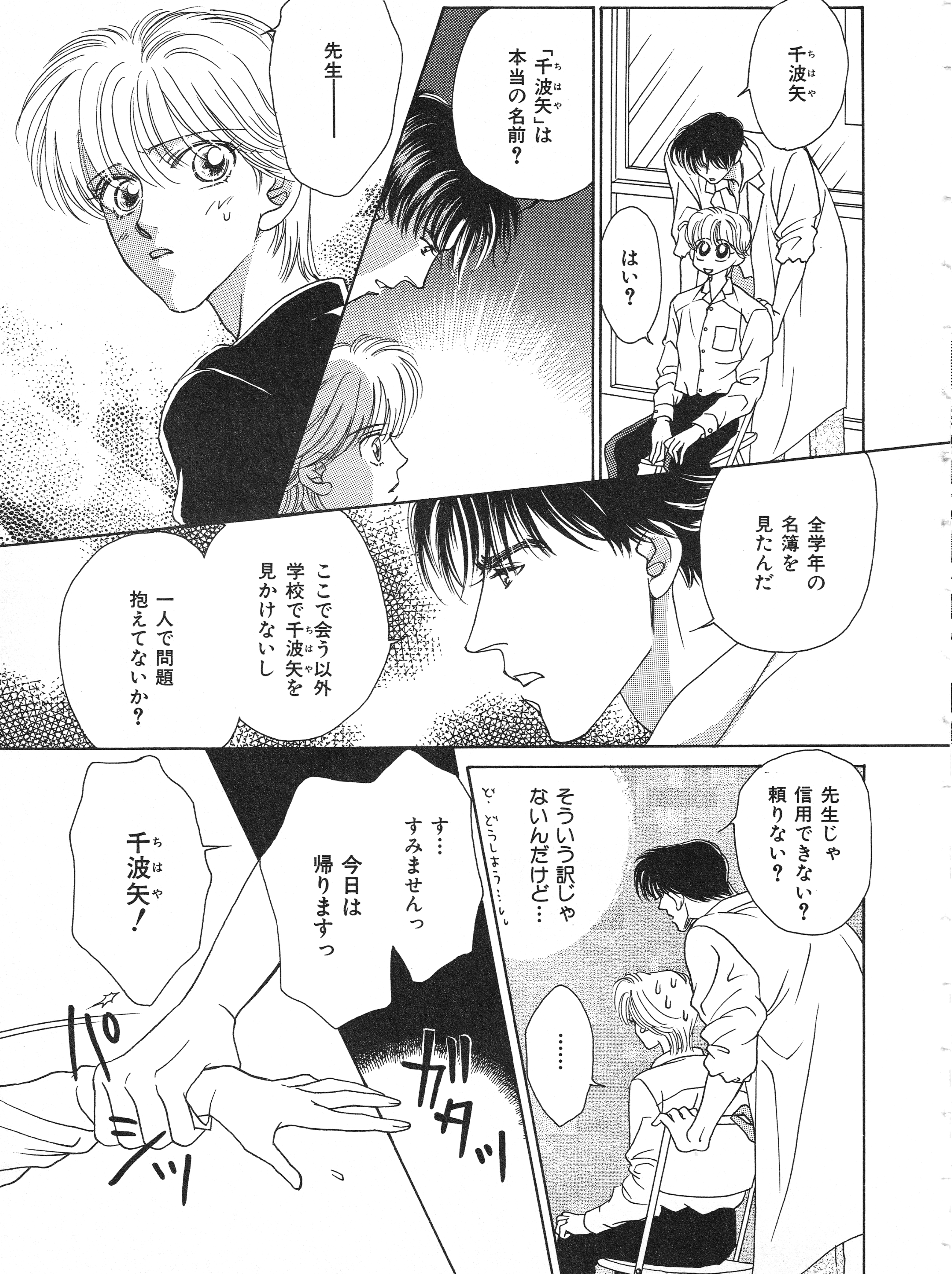
どうした？
遠慮しないで入りなさい
はい――
やっぱりカッコいいなこの先生――
千波矢!?
え!?
ぐいっ
この傷は!?
！
あ…っ
千人のアホ！先生にまた心配かけたじゃないか！
え――と え――と
ちょっと不注意で
ロッカーのことといい誰かをかばってるんじゃないのか？
いえっ そんなことは

それならいいけど
ぽむ
何かあったら先生にも話してくれよ
先生は――
ん？
誰にでもそんな風に優しいの？
千波矢
何言ってんだ俺――
すみません変なこと聞いて
俺はね中学時代が一番楽しかったんだ
だから中学の教師を希望した

一番長い友人も
中学からだし
生徒を見てると
思い出すことも
たくさんある
結構フクザツな
年頃だから色々
あるだろうけど
少しでも多く
楽しんで
欲しいんだ
…けどな
優しいのは
千波矢にだけかな
えっ
どきっ
一人の生徒だけを
こんなに気にする
なんて
自分の立場
忘れてるよな
ポリ
先生——
よくわかってた
つもりなんだけど

俺の方が
千波矢の来るのを
待ってるんだもんな
嬉しいなんて
俺…変？
トサッ
寿先生
これから調べ物
ですか？
僕もこの辺で…
お先に…
ええ
お疲れさま
です

パラ…
千波矢の傷・ロッカーの件も…
せめて周りの生徒の様子でもわかれば——
千波矢少し右向いて
はい
そうそのまま
……
?
今日はおしまい?
ガタッ


千波矢
はい?
「千波矢」は本当の名前?
先生——
全学年の名簿を見たんだ
ここで会う以外学校で千波矢を見かけないし
一人で問題抱えてないか?
先生じゃ信用できない?頼りない?
そういう訳じゃないんだけど…
ど、どうしよう…
……
す…すみませんっ
今日は帰りますっ
ガタッ
千波矢!
パシッ

ばっ
ぎゅ
好きなんだよ…！
だから
心配なんだ
…やっぱり俺
すごく嬉しいよ
先生——
教えて——
先生も同じ？
俺も…
先生が…っ
千波矢…！

グイッ
！
トン
この先は
千波矢には
まだ少し
早いかな…
俺…
もう子供じゃ
ない…っ
18なんだから

それじゃあ
どのくらい大人か
先生に見せて
…教師失格だ
俺は――
生徒に手を
出すなんて
ツー…!
ゾクゾク
ツ…
あっ…
千波矢は
敏感だな
いい筆の
下ろしがいが
あるよ
やっ……!
先生
そこ…やだ…っ
スッ

千波矢
いい?
先生
だ…めっ
んっ……!
カリ
学校で
「先生」とこんなコト
してるなんて――
も…
出る…っ
変にコーフン
しちゃうよ…っ
いつもより早い
んくっ…う
ビク
ゾクンッ
千波矢
大好きだよ
せん…せ…

こういうのを
一目ボレって
いうんだな
どうして今まで
千波矢に
気付かなかったんだろう
こんなに
かわいいのに
ズキ
先生――
ぎゅっ
ウソついてて
ごめんなさい…!
千波矢?
恐くないから
先生に任せて
そのまま
力抜いていて…
少しきついかも
しれないけど
あっ
ああっ
痛…い
せ…んせえっ
大丈夫
すぐ良くなる
はずだから

千波矢…
…うっ…
ギッ…
んん…っ
…ぁふ…っ
ギシッ
くっ……!
――っ!!
せん…せ…っ

これ以上
ウソつくのも
限界だよな…
俺はどうやっても
中学生じゃ
ないんだし――
もう一週間も
行ってないや…
ふ
今更 本当のこと
話したら
…嫌われるかな
会いたいなぁ…
バタン
兄貴
夕飯
…いらない…
何だよ
具合でも
悪いの？
もぞっ
も――
うるさいなー
お前には
関係ない

そうだ
寿が学校辞めるって
聞いてる？
グーゼン
校長室の前で
聞こえちゃってさ
まだ保留らしいけど
え!?
どー―して!?
ガバッ
なんか 教師としての
資格がどーのこーの
言ってたけど
ゲージツ家は
気まぐれ
だかんな
あ…！
先徒に手を出す
なんて
教師失格だよな――
俺のせい…!?
千人！
寿先生の家
どこ!?
住所は!?
ビクゥ
な 何だよ
急に〜〜〜
早く！

ダッ
先生…
寿先生!
ビーッ
ビーッ
グッ
ビーッ
どちら様!?
はいはいっ
今出ますよっ
ガチャ
先生
辞めないで!
ち…
千波矢?
どうして
ここに……
先生は
教師失格なんかじゃ
ないよ…っ
とにかく
入りなさい
ゆっくり
話そう
ほら
これ飲んで
ぷるぷる
俺が学校から
離れれば
千波矢の力になれると
思ったんだよ
!
俺が教師だから
話せないことも
あるだろう?
もう千波矢しか
俺の生徒じゃ
ないんだ
先生——
俺…っ
ずっとウソ
ついて
きました…

俺 ホントは中学生じゃありません
もう18です
!
どー見ても中学…
あの日弟と賭けして潜り込んで——
でも…っ
でも先生のこと本気になっちゃって段々 言えなくなっちゃって——
…ごめんなさい…
俺——中学生じゃないとダメですか…?
先生の好みじゃないですか…?

せっ…先生
フワッ
!
ばかだな千波矢
一目ボレだって言ったじゃないか
ポン
歳なんか関係ないよ

「千波矢」がいいんだ
トサッ
「千波矢」を好きなんだ

俺も先生が好き——
美術準備室
驚いたな
君が千波矢の弟とは
バスケ部のホープが
フンッ
生まれる順番間違ったんじゃないのか?
大きなお世話だ変態教師!
さっさと兄貴から手ェ引け!!
兄弟の幸せは祝福してやらなきゃ
コン
コン
どうぞ

寿先生
ひょっこっ
千波矢
兄貴!
何でここに!? その格好は!?
ああっ!?
良く似合ってるから
しゃあしゃあと
……
校内っていうシチュエーションも結構刺激的でな
←座ってるワケではナイ.
それじゃ君は部活へどーぞ
ポイッ
千人ジャマするなよ
ダンッ
ちくしょーーっ教育委員会に訴えてやるーーっ!!
かぎあけろーっぷい
兄貴!! 目を覚まして!!
ダンッ
大好きな人は放課後俺だけの「先生」になる
おわり

Kai Nanase
七瀬かい
ビーボーイコミックス
『花束は誰のもの』好評発売中!!
愛と呼ぶには、
つめたすぎて……。
金(きん)ボタンが冷(つめ)たい

ハア
ハア
フウ
や
やめるんだ
君達
こんな事して
何になるって
いうんだ?

俺達の
気が済むのさ
いいかげん
観念しろって
生徒会長さんよ
ケツ丸出しで
強がっても
いられねェだろ?
ビシッ
痛っ
——
いいぜ
大声出して
人呼んでも
知っての通り
俺達
退学決まってっから
怖いモノ無しさ
そのかわり
あんたの恥ずかしいカッコも
見られちゃうけどな
こいつら——

格好良かったよな あんたの演説姿
確かに彼らの素行は誉められたものではないだろう
しかし ここで彼らをこの学園から爪弾く事が最善の解決策と言えるだろうか?
署名運動までしてくれちゃって学園側にかけ合ってもくれた
まったく ありがたくって涙が出ちゃうね
不良の俺らもさすがにホロリときかけたよ
結果的には退学決定は覆んなかったけど最後に まんざらでもない思い出が出来たって柄にもなく思ってさ
けど あれ 皆 ポーズだったんだって?

誰が そんな事
誰だって いいだろ 親切な人が教えてくれたんだよ
あんたが どんなに すましてお綺麗な顔してても裏じゃ汚ねー事考えてる偽善者だって
俺は…
ガッ
俺達ダシにしてせいぜい良いカッコしたよな佐久間会長?
最後に そのツケ払ってもらうぜ
!!

やめ――……
カシャン――…

ハア
ズッ
ズズッ
ハア
男に…なんて
しかもあのおっかない生徒会長様に勃つかいと思ったけど
あんた眼鏡とると結構かわいいツラしてんだ?
へへ
満更でもないな
ユサユサ
い痛…
絶対ソノ気になるって奴に太鼓判押されても今一信じられなかったんだが
奴――!?

おら もっと腰 振れって
はっ ぐっ
平井 はやくしろよ 後が つかえてんだぜ
せかすなって すっげェいいんだから
佐久間サンは そうでもないみたい だけどな
やっぱ 血ィ出てるし そうとう痛ェの?

んじゃあ サービス
キュ
や…
触んな…っ
ハァ
ハァ
ほん…と その辺の女より イイぜ
ハァ
ハッ
グッ
ハァ
まるで AVの女みたいだな 佐久間サン
その格好 あんたを慕う生徒や 覚えのめでたい先生達に 見せてやりたいぜ

良かれと思って
した事が
いつも
裏目に出る――
出っ

あの日
泣いていた 弟に
手を差しのべた事が
俺の母の心を
頑なにさせてしまったみたいに
慎一に
借りたですって？
嘘おっしゃい
そして弟は俺を憎み
こいつらも――
奴…って
まさか

……
い…てて
あいつら
人の身体だと思って
好き放題しやがって
カシャ
あ――
こりゃあ…
ふんだな
いいぜ
俺達の事
訴えたって
そしたら
どんな事したか
逐一丁寧に
証言すっからさ
あんたも
終いにゃ
結構よがってた
とか
美味そうに
俺の○○○
しゃぶってたとか
高かったんだゾ
弁償しろョ
楽しみだぜ

ガラッ
──こんな暗い所で
いったい何してるんだ兄・さ・ん？
ゆ
悠二(ゆうじ)？

何だよ 酷い格好
私刑(リンチ)にでもあったみたいだな
リンチというより…
もしかして輪姦(まわ)された──とか
もしかして大当り(ビンゴ)？

兄さんを襲うなんてモノ好きもいたもんだな
それとも怖れを知らないというべきか
違うよっ
こいつは俺を憎んでいる――
ちょっと・その意見の違いから揉めただけだ
へェ最近は強姦の事もそう言うんだ
ほら立たせてやるよ
違うって言っただろ!?
…てェ

人が せっかく親切に言ってるってのに何だよその態度は
お――お前こそいつもは無関心なくせになんだって……
ゆ悠二!?
何…

やっぱり犯られてんじゃん
こんなにしっかり痕が残ってるってのにごまかせると思ってんのかよ
お お前には関係ないだろ?
あるね
俺の自慢の兄貴がどんな目にあったか知る権利がある

な 何言ってんだ
お前は俺の事なんてッ
グイッ
本当は嫌って——
あっやめろっっ
ヘェ すげェや ココ
ドロドロン なってるの
見た?

切れちゃって
血は乾いてるけど
結構 出血したんだ
お――痛そう♪
知ってるか？
中に精液
入れっぱなしだと
下痢すんだぜ
……
早く出さねェと
かき出して
やろうと思ってさ
なっ
何すん
あ
後で自分で
やるから
やめ…ろ
でさ
そいつら兄さんも
達かせてくれた？
……
一方的に
痛いだけじゃ
なかったんだろ
結構
いい感じじゃん？
お硬い
生徒会長さんが
好きモノだとはね
いいよ いいよ
何回でも
達っちゃえって
それじゃ
平井と中嶋と
毛利…
誰が一番良かったか
教えろよ

なんで そいつらって 知ってるんだ
まさか お前が――
まさかって 薄々 勘づいて たんじゃねェの？
じゃなきゃ こんな離れの教室 来やしねェよ
あいつら 単細胞だから ちょっと吹き込んだら 激高しちまってさ
ただ痛めつけるんじゃ おもしろくないだろうって 言うから 犯っちゃってみたら てね

グッ
おまっ
お前はっ
そんなに 俺の事が 憎いのか――……

俺が佐久間の家に引き取られたばかりの頃の事
覚えてるか？
まだ小学生で母親に死なれて
途方に暮れてた俺を親父が家族の了承も得ないで連れ帰って
すっげェシュラ場になったよな
特に お前の母親
寝耳に水って奴だったんだろうけど凄かったよな
十年以上も騙してたのねっ
なんだってこんな子供の面倒あたしが見なきゃなんないのよ
何よその嫌な目つき母親ゆずりなの!?

それでも結局は そのまま佐久間の家に入り俺は何不自由のない生活をおくる事ができた——
しかし あそこは俺にとっての家じゃあなかった
お前だって それはよく知ってるだろう？
だから家を出たのか
あの女も清々してたがな
一人暮らしをはじめてようやく息がつけた気がしたよ
今の俺には一人で生きて行く力がある
俺は自由だってな
ところが

そこで
気が付いたんだ
お前が
いない事にさ
佐久間の家では
いつも困ったような顔で
俺を見てたな
そんな時
俺がどんなにみじめで
腹立たしかったか
お前にわかるか？
親切ごかしのその手が
俺に触れるたび
俺は怒りで震えたよ
嫌なら嫌そうな
顔をすればいいものを
変な正義感で
いらぬ おせっかいを
しかけてくる
いつも辛く あたられた
お前の母親なんかより
お前の方が
俺は

悠二…
そんな所に居たら
風邪ひいちゃうよ
お母さんには僕が
言うからお家帰ろ？
憎くて
憎くて
名前だって
慎一 悠二って
ほら ちゃんと順番に
父さんがつけてくれたんだろ
お前は僕の
弟だよ——
殺したい程に
悠…二…

悠…二?
……
憎すぎて
離れられない
身体になっちまったのかもな
お前――
言ってる事と
やってる事が違う

俺の事
嫌いなんだろ?
ああ
憎いんだろ
殺したい程
ああ
だから
あの3人に
俺を犯らせた…
……
あいつらは
本当の事なんて
何もわからない
バカ者共だ
あんたが本気で
自分達を
助けようとした事だって
わかってねェ

だから あれは罰だ
あんな価値もない奴等を助けようとしたあんたが悪いんだよ
――!?
そ…んな
理不尽…なっ
ゆ悠二っ

これも…
何かの罰――なのか？
憎めばいいあんたも
俺があんたから離れられないように
あんたも俺を死ぬ程憎んだらいいんだ
他の奴らにかまけていられない位
俺だけを

その言葉は
まるで愛の告白のように
聞こえたけど――
冷――
冷たい
悠二
今…更
お前の服のボタンが
あんただって こんなに
熱くなってるくせに
こんな小さな
ボタンが
俺の心を
凍えさせる
悠――
本当の お前に届くように
素肌で俺に触れてくれ――
おわり

ビーボーイ
BOY
ボーイ
Zips ジップス 2
定価：本体800円＋税
大好評発売中!!
この命 つき果てるまで
激愛特集
君だけを愛しぬく!!
オール読み切り
青海信濃
碧磨あてね
大出なつみ
美輝 妖
緋色実
果桃なばこ
新田祐克
定広美香

護と真司のLOVEストーリ
act.9 26P
「好き」とか「欲しい」とか「独占したい」とか
色々あって、恋はムズカシイ…?!
GOLD
ゴールド
ゆめどの
夢殿りさ
SBBC『GOLD』好評発売中♥

春
四月
ねえねえ
君たち
山岳部
入んない?
夏休みは
飛騨・高山で
合宿するんだよっ
野球部
それより
生物部だよ
生物部
ひよこの
すりこみ
試そうよ
茶道部に
きませんか?
今日だけ
お抹茶とお菓子
ただですよ
ただ!
ふえ~っ
あいかわらず
すっごいなーっ
う
うん

ねえ君 フェンシング部入んない？
おいでよ～
俺は3年だっ!!
またまた―
真司先輩っ！
真司先輩でしょ!?
え？
天野ですっ！
お久しぶりですっ!!
天野って… 友也!?
あのちっこかった…
いや今もちっこいか
はいっ!!
お会いしたかったですっ先輩っ!!
天野友也 166cm 53kg
真司先輩にもう一度指導していただきたくて
ここに来ました
真司先輩と同じ六中出身です
以上よろしくお願いしますっ
よお もてんじゃん真司
女の子だけじゃ足んなくて男の子まで手ェ出しちゃったりして…
守備範囲広がったちゃん
天野ォ
気をつけないと真司に犯されちゃうぞぉ
あのなっ
俺
真司先輩ならいいですよ
おお―

き 聞いたか 護っ
あっぶねーよな
え
あ うん
オラ 練習 始めるぞーっ
一年は ランニング
他はストレッチ いくぞーっ
よーし
今日は これまでっ!!
護 わるいっ
今日だけ 体育館の 戸締まり 頼めないか？
うん いいよ
お先にーっ
おつかれーっ
一緒に 帰りましょ
真司先輩っ
天野
ちょっと 時間いいか？
はい？
お前さ
さっき みたいなの
ちょっと まずいよ
はい？
うちの連中 みんな 気がいいから
たいして 気にしてない けどさ
俺を 追ってきたとか
そういう つまんない事 言わない方が いいぞ
団体競技だしな

—でも…
俺 ホントに 先輩のこと 追って来たんです
…真司先輩
ん?
ちょっと 見てくれます?
?

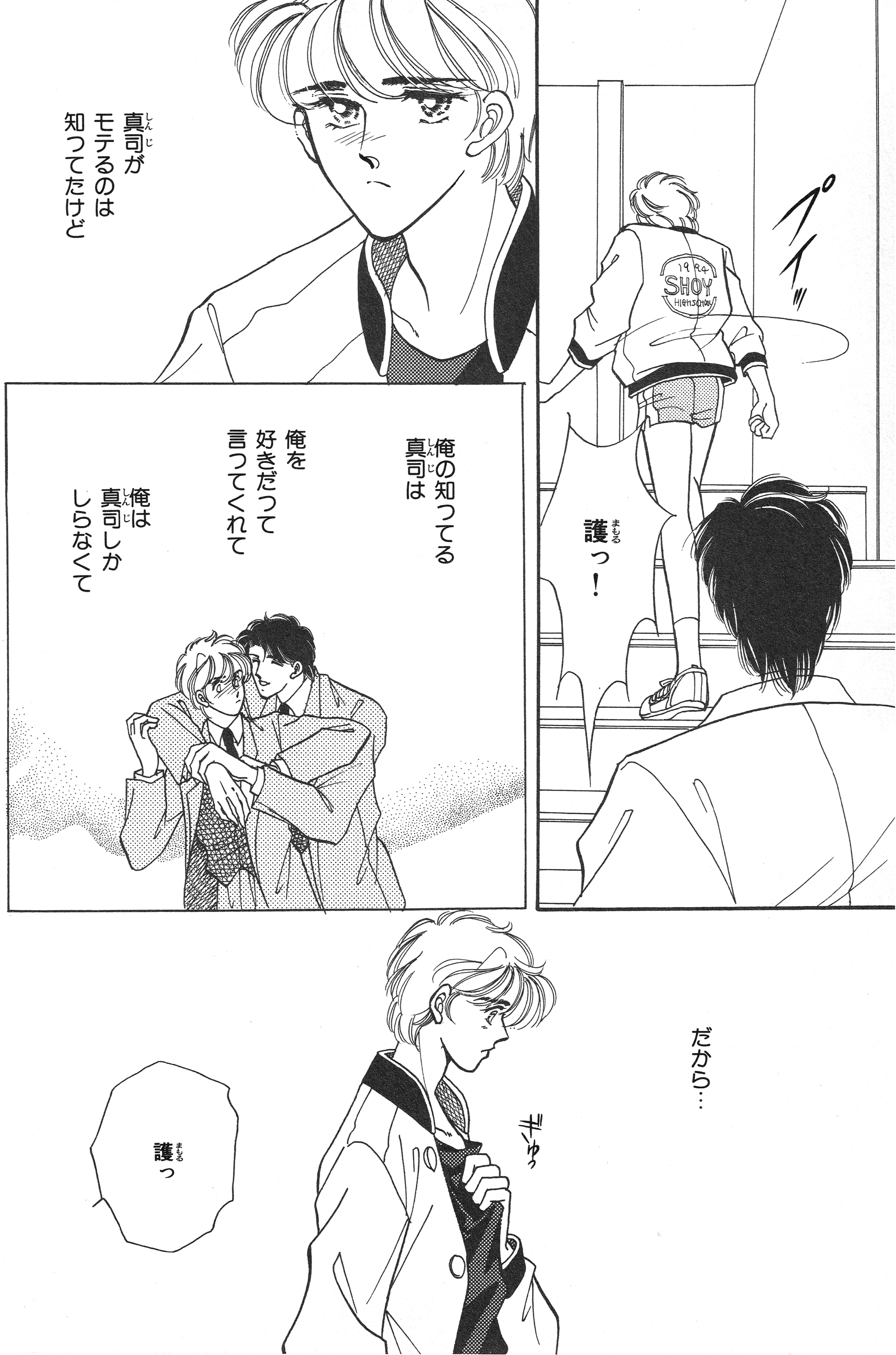
………
先輩が 卒業してから ずっと さみしくて—…

それでわかったんです
——俺
先輩が好きです

…じゃあ…
おやすみなさいっ
あ
天野っ!!
…
ガチャン
—まいった……
はあーっ

ま…もる…
プイッ
護っ!!

ちょっ…
待っててっ!!
護っ!!
見るつもりなんかなかったっ!!
マネージャーが今日は急ぐって…
だから俺…
護…


プイッ
護っ！
真司がモテるのは知ってたけど
俺の知ってる真司は
俺を好きだって言ってくれて
俺は真司しかしらなくて
だから…
ギゅっ
護っ

護
あの…
もしかして…
…妬いてる…？
…っ…
まもる…

ピクッ
…っ…
ぎゅっ
…んっ…

ビクッ
…っ…
んんっ……
バサッ
護…
俺のこと好き…？

言って
まもる
……
…ん…
…あっ……

…っ!!……
先輩が
卒業してから
ずっと
さみしくて

俺
先輩が好きです
…あっ…
…し…
しんじっ……!
なんで
あんなに
まっすぐ
言えるんだろう…?
…っ…!!
あっ…
…し…んじっ…
まもる…

…っ!!
俺は 言えないのに―
…あっ…
ああっ!!
…あっ!
…し…
しんじっ…!!
こんなに
なつても

しんじっ!!
まだ 言えないのに…

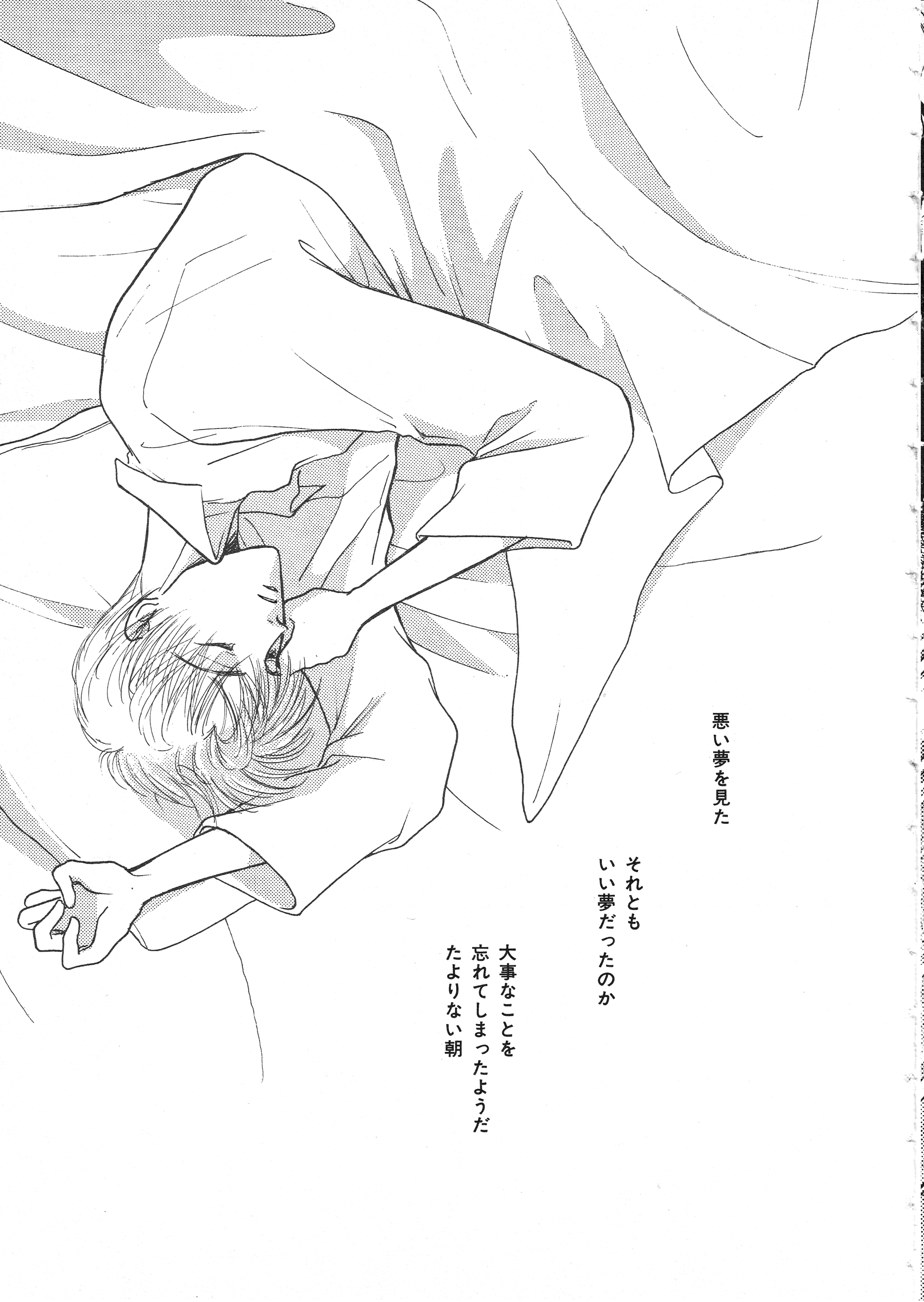
俺は
護だけだよ
お前がいやだって言ってくれたら
他の誰にもぜったい触んない触らせない
約束する
好きなだけ言ってろよ
絶対だよっ!!
バタン
………
ホントだぞっ!?
肩だって組まないし
握手もしないぞっ
……
どーしてこう臆面もなく…この男は

スッ

真司(しんじ)先輩っ!!
おはようございますっ
おすっ
グイっ
?
CHU

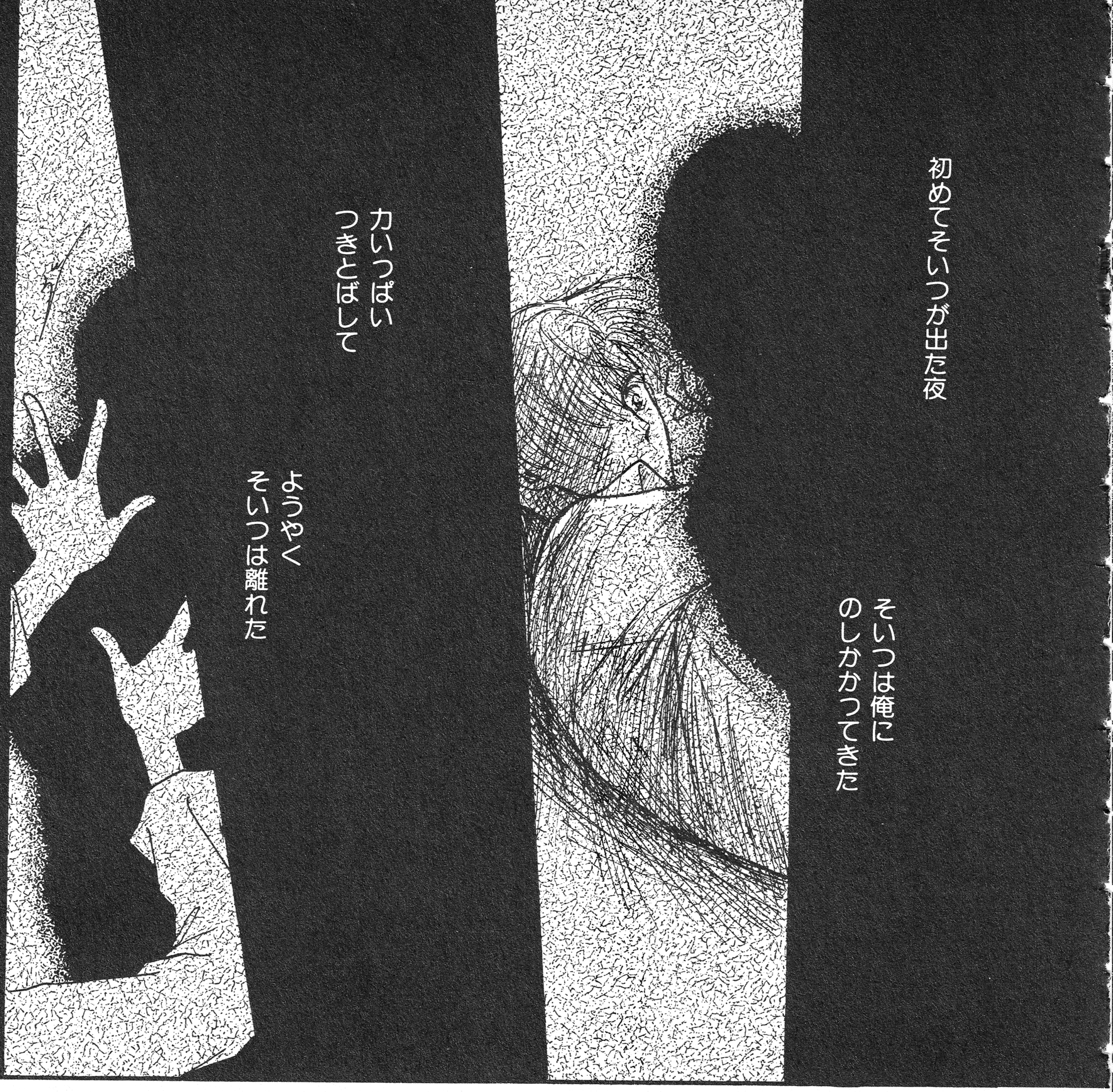
……
ぼーぜん
ひそ ひそ
またね先輩
クラブが楽しみ♡
はっ
待って!!
待ってくれまもるっっ!!
今のは 今のは 今のはなっ!!
いーよ 真司の約束なんてそのてーど!!
おわり

このせつなさから逃げ出す方法、それは…
ハート・キャッチ・ラブ
Trace
トレース
野守美奈
のもり みな


悪い夢を見た
それとも
いい夢だったのか
大事なことを
忘れてしまったようだ
たよりない朝

穂高!
おはよ 小沢
よお
広瀬知らね? あいつ 今朝 部活さぼりやがったんだ
広瀬?
——って 誰だっけか
見てないよ
上概も一緒か
穂高なら 知ってると 思ったのにな サンキュ じゃあな
何で俺? 憶えてねーよ
うん

どうしたの 克己 ボーっとしてるね
ああ 寝不足なの
寝不足?
うん
うひゃー 太陽が黄色い
俺の部屋には 幽霊が出る




それ以来 奴は
近寄って来ないが

俺にはわかる

夜
ひとりきりのはずの
部屋で
誰かの気配がする

誰の席だっけ
もう2学期も終わりだけど結局半分も名前憶えなかったな
それでやってこれちゃったしなー
穂高！誰を見てるこっちに集中しろ
誰も見てませんすみません

何だ お前ら ケンカでも してんの？
——……
え？ ——あ
何だっけ？
そこ!!
消灯時間です電気を消して下さい

幽霊は
デスクライトを
つける
光は平気らしい
カチ…
最近
姿がはっきり
見えるようになった
何を考えてるん
だろう
淋しそうな横顔

胸が痛くなる
――っ
やばい
こっち見た

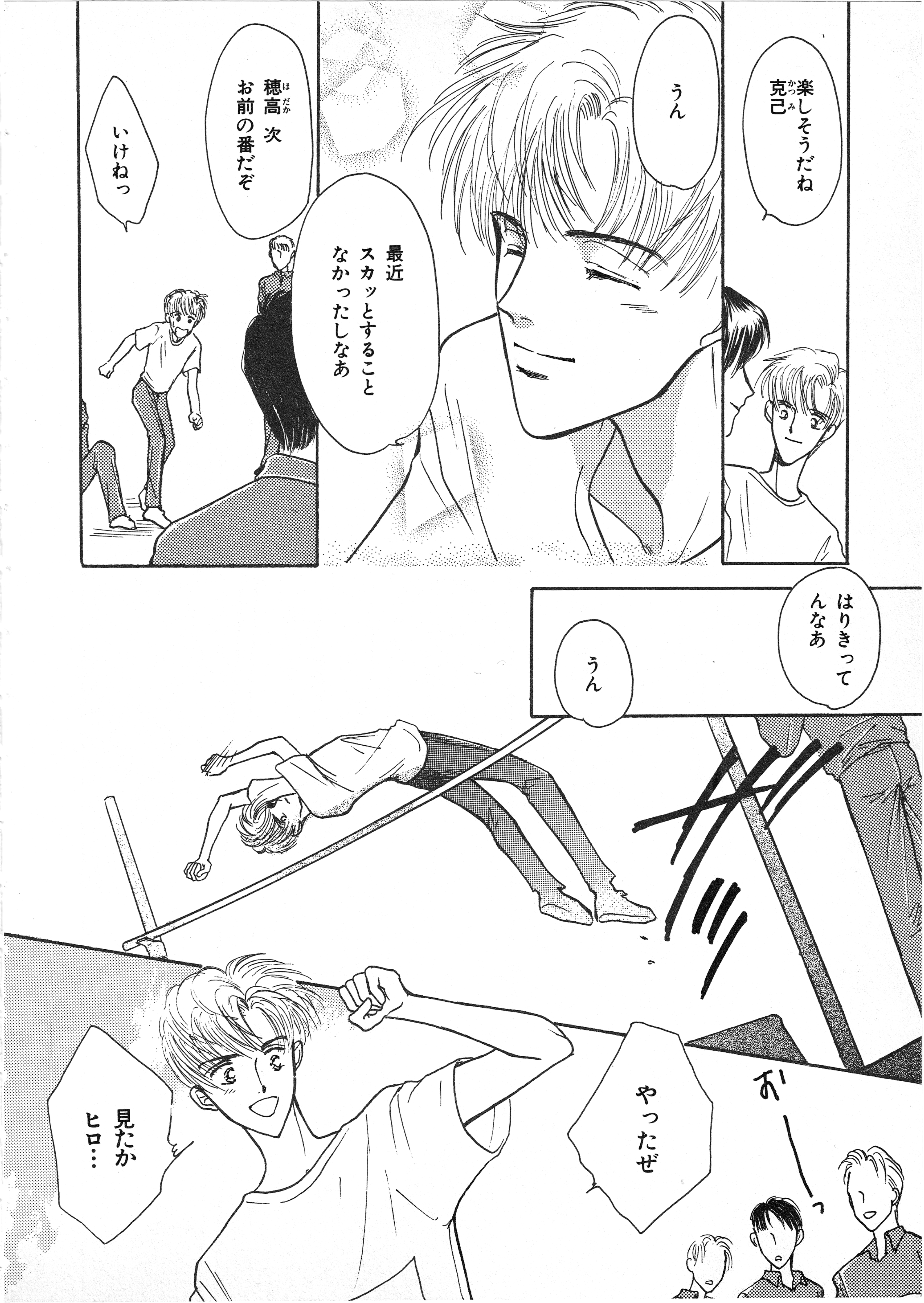
その夜は
そいつの気配が
消えるまで
寝付けなかった

――
とにかく やめておくよ
え――? じゃあ小沢は?
じゃあって何だ じゃあって!!
行かねーよっっ!!
二人とも 冷たいよお
くすん。
お前よりは マシだよ
オレ 先 行くぞ!!
およよ
お前らも帰れよ もうすぐ予鈴 鳴るぞ!!
怒らせ ちゃったよ
ふふん
自分が神経細かいと 思っている人間ほど 他人に対して 神経届かないこと 多いよね

そういう僕も その一人で たまに失敗 する
どきどきどき。
ななな 何のこと――?!
にっこり。
上級って 時々怖い。
キーンコーン コーン…
――って 誰のこと?
予鈴だよ 行こう
ちぇ――っ

ひょっとして
俺のこと？
まさかなー
俺 神経
太いし
鈍感だし
深く考えんの
苦手だし
カチカチ カチ
コト…
あいかわらず
部屋で気配がする
キシッ
物音にも慣れた

気配に安心する
自分が不思議だ
ピーッ
次 1M55
50飛んだ者は
順に飛べ
あれー？
上槻 脱落？
僕にはとうに
関係ない世界だよ
はい次ー
次 1M60
小沢から
瑞樹も残ってるか
すごいなー
俺 次も
超えるよ
うずうず
小沢 瑞樹


楽しそうだね 克己
うん
最近 スカッとすること なかったしなぁ
穂高 次 お前の番だぞ
いけねっ
はりきってんなあ
うん
おー―っ
やったぜ
見たか ヒロ…

……?
云いかけたこと 忘れちゃつた…
はい 穂高 おわり——
バー 1M65
ドンガラ ガシャン
何やってんだ あいつ
さあ…
ぜんっぜん とべてねー…
体当たりだね…
何だか ものたりない
自己最高 せっかく飛んでも
穂高も食う?
変なポテチ 試食会
いらない それマズかった
誰かと食べた そいつは好きだって 言つてた
誰だつけ 最近物忘れが 多い

何かさみしー
どうした穂高
秋か？
ぼー……
また体動かして
スカッとしてきたら？
うーん
よお 小沢
おっせーぞ
悪ィ…

よお
広瀬も来たか
——？
ヒロセって奴
どこにいるの？

あれ？
しん…
穂高
お前…っ
いい加減にしろよ 最近!!
え？
行こうぜ
穂高…
他人の間のこと口出したくないけど
行き過ぎだお前…

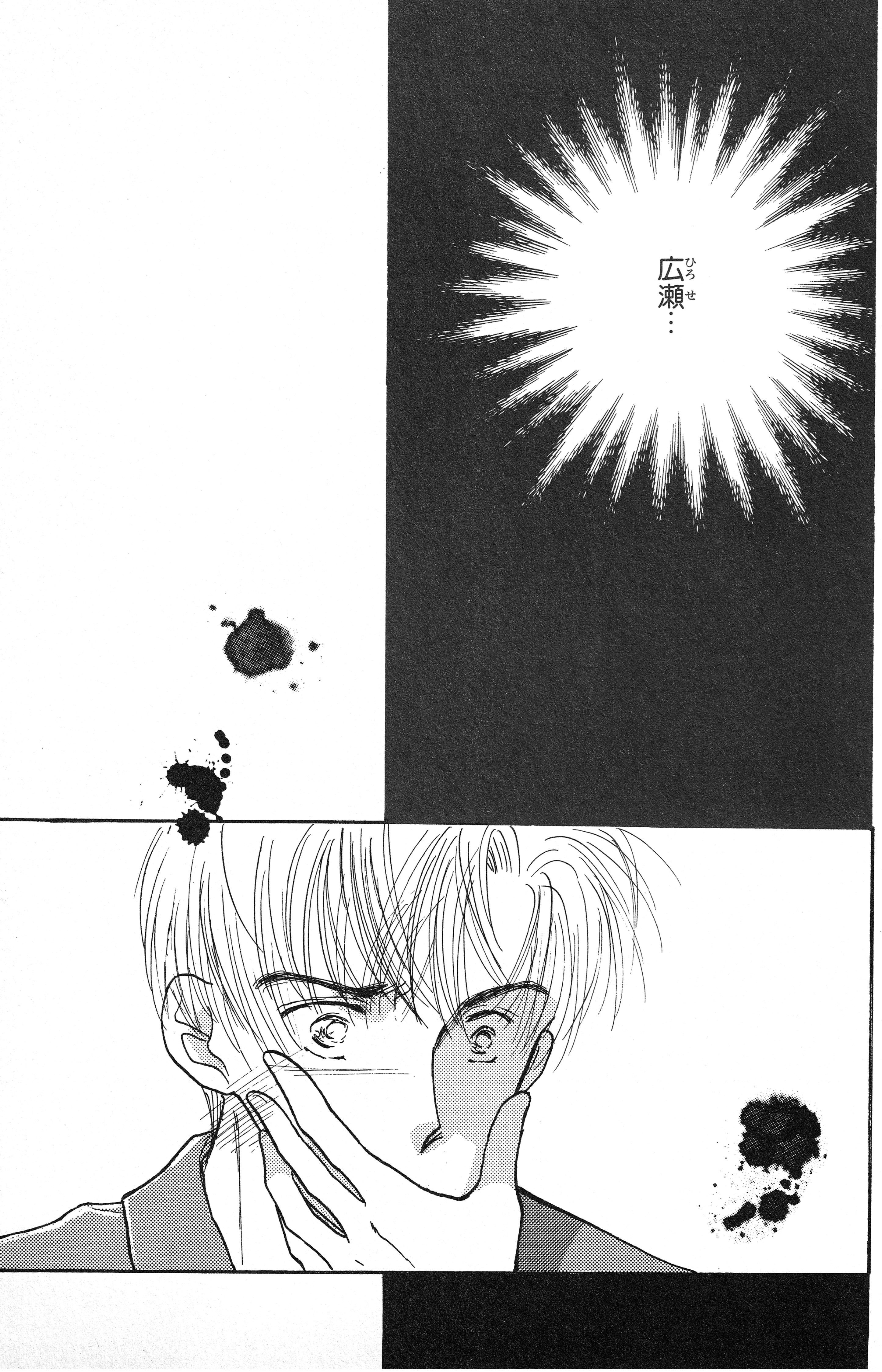
それでさー
ぎゃははは…
うるさいなあ
ばりばり
ワケわかんねー

こんな時は
ウジウジ考えずに
眠っちゃおう
なかったことに
しちまえ
忘れちゃえ
ばか
チッ チッ チッ
はっ
これ…
コトン…

——ヒロ…セ?

話しかけて
いいのか?
俺いないんじゃ
ないの?
話しかけても
無視して
俺なんか
見えないって
感じでさ
俺が悪いん
だけどさ
——じゃない…
幽霊なんかじゃ…

気持ちを押しつけようとしたのはあやまる
だけど こんなのはつらい――
広瀬…？
俺は真剣だったんだよ


広瀬…

ああ　そうだ
ヒロセ　トオル
俺のルームメイトで
親友で——
幽霊なんかじゃない
ずっといたんだ
広瀬(ひろせ)　俺
お前のこと
見えてなかった
何で俺…

俺　こわくて…
悪かった
もう二度としない
え…
ちがうよ
無理しなくて
いいよ
違うんだって
バカ
——俺…

穂高…
ひどいことした
つらかったよな
ごめんな
俺だけ忘れて
楽になって
こわかったのは
俺たちの間が
変わってしまうこと

よかった
幽霊じゃなくて
幽霊?

広瀬は
全部
納得した訳じゃ
ないと思う
ごめん 広瀬
嫌いになるなよ
それでも肩を
なでてくれたので
鼻の奥が痛くなつた
よかつた
広瀬があたたかい

穂高(ほだか)
忘れもの
ノート
へ?
机の上に
置いたままだった
あっ
そっか
せっかくやった宿題
何だ お前ら
仲直りしたの
もともと
ケンカなんて
してないよ
嘘じゃないのに—
小沢
タイしめろよ
だらしない
何だよ
せっかく
心配して
やってたのに
ぷっ
トオルは真面目で
融通(ゆうづう)きかないし
思い込みが
激しいからね
お前みたいに
表現形が
天真爛漫(てんしんらんまん)な奴の
デリケートな部分は
見えにくいだろうな
オレって、デリケート?!
もしかして
こないだのって
同情してくれてたの?
わかんなかったよー
んなのー
人は
自分にない部分に
魅かれたり
するから

広瀬(ひろせ)
ごめんな
二度とお前のこと見失ったりしないから
やっぱり俺お日さまの下が好きだな
おわり

言葉(ことば)を失(な)くした人魚(にんぎょ)たち
胸に痛いピュア・ラブ・ロマンス
僕はこの恋と死ぬだろう…
小説 皇極(こうぎょく)あかね
挿絵 桑原祐子(くわばらゆうこ)

望みのものを手にするがため
魔法の呪縛を受け
その声音を失いし者よ
真実を伝える術を失くしてしまった
哀れな者よ
それ故
大切な人のこころをも手放してしまった
愚かなる者どもよ
海の泡となって
消えるがい い……

## 1

その瞬間、天野秀軌は臆病な自分自身に嫌気さえ覚えていた。

「――――！」

いま天野の瞳のまえでは、あろうことかキスシーンが、まるでTVドラマよろしく実演されているのだ。

ただよくあるドラマと大きく異なっていたそれは、登場人物が男同士であるということ。そしてなによりも天野に衝撃をもたらしたのは、逆光に浮かんだそのシルエットの片割れが私立桐蔭学院がほこる文武両道に秀でた存在、生徒会副会長の『坂上芳樹』その人であったということにある。

新年度予算案の編成におわれ、天野秀軌が己れの執務室である、ここ生徒会室に踏み入れたとたんの出来事であった。

予想外の展開に、切れ者の称号をいただく生徒会長殿もさすがに躊躇した。しかし本来の正義は自分の方にある。その勇気をもって、天野は窓ぎわで熱心に作業をつづけている両者に声をかけた。

「…すまないが、そこを空けてもらえないか」

その声音にうっとりと坂上の接吻を受けていた者は、飛びあがらんばかりに正気にかえる。

「あっ、天野会長！」

見ると彼の胸元には一学年をつげるバッジが輝いていた。

「なんだ、無粋だな」

戸口からはちょうど背を向けているかっこうになる、副会長の坂上芳樹の方は、悪びれることなくそう天野に告げた。

「もう少し、場所がらをわきまえて欲しい」

受けて側の天野もそれだけ告げると、何事もなかったかのようにさっさと室内奥にある机へと歩を進める。

「しっ、失礼します」

「あぁ、またな」

狼狽そのままに逃げていく後輩に向け、坂上は陽気に声をかけて見送った。

そんなありさまを視界のふちにとらえながら、天野はぼそりと感想を口にする。

「見ない顔だな」

「まいったね、本気で云っているのか？ 1―6の浜崎じゃないか。今年の注目株だぞ」

「そうなのか？ まあ確かにかわいい貌はしていたが」

「あいかわらず、真面目な生徒会長殿は世情にはうといようだな」

「おまえが精通しすぎているんだ。それよりもここには連れ込むな、他に誰か来たらどうするんだ」

「大丈夫だって。いまどき生徒会室にせっせと通う律儀者は、俺とおまえぐらいだろう」

平然と云ってのける。

確かに進級直後の編成案作成時期のいまは、役員以外はここを訪れるものはいない。しかも明日はたのしい全校一斉学力テストの日とあれば、書記の田原や会計の松永でさえよりつくことはあるまい。まさに正論。

「あきれた男だ」

「そう云うなって、誰かさんがキスさせてくれないから他で補っているんだろうが」

ぬけぬけとそれだけ告げると、すでに書類に瞳をおとしかけている天野の顎をとらえて上向かせる。

「何だ」

サラリとした艶やかな黒髪と色素の薄い肌。ともすれば儚いようなどこか少女じみた姿。そんな玲瓏とした貌だちからははかり知れない、毅然とした声音がたしなめる。

「どう？ 俺とキスしてみない」

パシッ、とその不遜な手をはたく。

「いい加減にしろ！ 明日までに書類をあげてしまいたいと云ったのは、おまえの方なんだぞ」

「おおこわ、マジに怒るなよな。せっかくの美貌が台無しだ」

大げさに肩をすくめる長身を、無言のまま天野はさらに下から睨みあげた。強い意志をものがたる怜悧な双眸。

「わかりました。ちゃんと仕事します…ったく、どうしてキスさせないんだ」

舌うちとともにブツブツとつづく。かりにも副会長の肩書があるので、坂上も天野の横の机に落ちつき職務推進に励みだす。だが口

の方はいまだ止まらない。

「…だいたいさぁ、それ以上のことは許しておいて肝心のAがないっていうのが…げせないんだよなぁ」

「なにか云ったか？」

「いえべつに」

　坂上にとっては不本意極まりなかったが、これ以上切れ者の会長さまの不快をこうむる前に、その不埒な思考を断ち切ることにした。

　天野秀軌と坂上芳樹は現在の桐蔭学院をになう双璧である。

　そもそも名門校の代名詞をいただく桐蔭学院である。下は幼稚舎から、上は大学院までというエスカレーター式の付属校をもつ、学校法人『桐蔭』の高等学部のうちのひとつ。遠方からの進学者のための寮までそなえた、男子高等学部がこの『桐蔭学院』なのだ。

　一筋縄ではいかない年ごろの、しかも野郎ばかりの学院をしめているのが生徒会なのである。自由の誉れたかい桐蔭において、生徒の自治はもとより、その校則にいたるまですべてが他校を凌駕していた。

　現在にいたるまでには数々の名君が君臨してきたのだが、天野と坂上の両者もまぎれもなくその史蹟に名を連ねるであろう存在である。

　その二人が寮で同室になったのはちょうど一年前。

　もともと寮生だった天野のところに、両親の海外赴任がもとで、後から坂上がころがりこんで来たことに始まる。

　そして今年の進級にさいしても、二人は同部屋のまま変わることなく続いている。はたから見てもまさに両翼、麗しい外見のわりにはきつい瞳がその可憐さを隠してしまっている切れ者の天野。対するは学力のみではなく、体育系においても抜群の成績をのこす美丈夫の坂上。

　二学年の後期から二人はとうぜんのように圧倒的な支持を受けて生徒会にのりだした。そして二期目の今期も、人々の支持と羨望のもとに彼らは君臨している。

※

「なあ天野、いまからどうだ？」

　自室の机に向かい、明日のテストにそなえている最中の天野に、いきなり不謹慎な声がかかる。

　なにごとかと視線をはせるが、その坂上のにやにやした笑みによりすぐに制する。

「いい加減にしておけ。明日の学力は専攻科目のクラスわけに左右するんだぞ」

「なにをいまさら、どうせ俺たちはAクラスに決まっているだろ。そんなことより…相手しろよ」

　腰掛けていた椅子をぐるりと反転させられ、まんまとその腕に天野秀軌は抱きしめられる。体格でいえば、まさに体育会系の坂上にはかなわない。

「週末以外はだめだと云ったばかりだろ。おまえは良くても、こっちは身がもたない。わりのあわない仕事はしたくないんだ」

　坂上芳樹に云わせれば、もっとときめきぐらい感じてくれてもいいはずの状況なのに、天野会長殿は冷淡に口にする。

「仕事って…もう少し他に云い方ないのかよ」

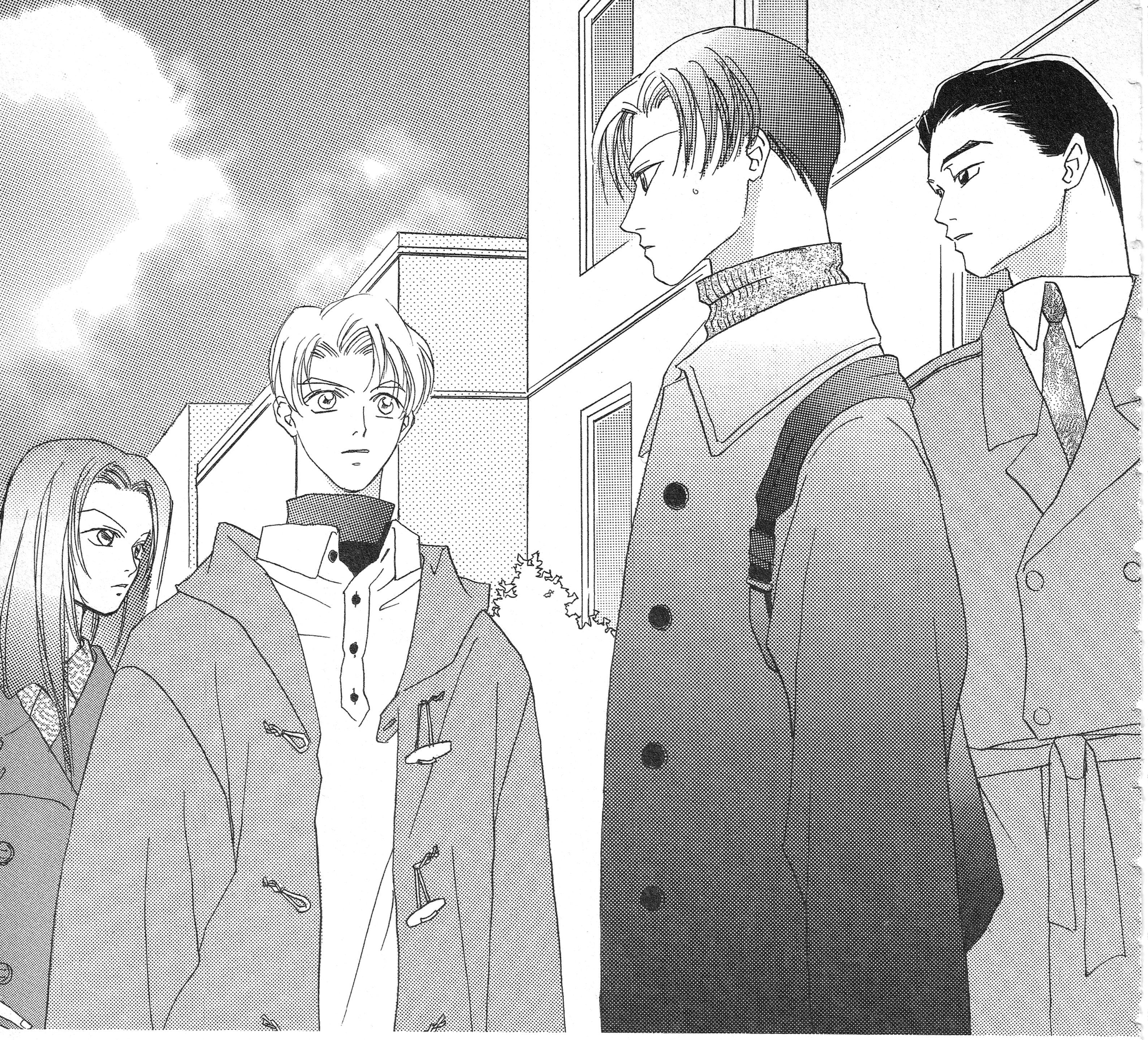
「他になにがある。それとも坂上芳樹の性欲処理業務か」

「この野郎」

　ぐっと腕に力をこめて、さらに冷たい人を抱き寄せた。

　坂上芳樹と天野秀軌は早い話、そういう関





係である。二人が関係をもつようになってからすでに10ヶ月ほどたつのだが、両者の間にあるのは『契約』にしか他ならない。

　奨学金制度により特待生として入学している天野にとって、いまの桐蔭での生活に不自由することは何ひとつない。しかし進学を希望している彼には、高校を卒業してからの日々に対する不安はつきものであった。

　おなじ奨学金を得て進学したとしても、現在のような生活までは望めない。寮から出て自活しなければならないということが、天野のまえには大きく立ちはだかっている。まして、エスカレーター式の桐蔭以外を受験しようものならば、さらに資金が必要となってくるのだ。

　天涯孤独。そんな単語があてはまる天野秀軌の人生において、唯一のすくいがこの桐蔭での生活であった。そして許されたこの三年間のうちに、彼は資金を貯めなければならない。

　寮生ということもあり週末だけのアルバイト。土曜の夜から日曜の、しかも寮の門限に間に合わせるための仕事など、あまりいばれた類のものは残されてはいなかった。

　嫌悪感などなかった。

　天野秀軌はおのれの価値をあまりにも知ら

なすぎたのだから……。
　一年のころからはじめた深夜肉体労働。さすがに法律では罰することはできない〔男同士は法律では想定されていない〕とはいえ、仮にも桐蔭の生徒としての自覚はある。「春をひさぐ」ことでは罪に問われなくとも、未成年という点においての法が戒められているのだ。
　バレないようにと細心の注意をはらっていたにもかかわらず、運わるく発見されてしまったのが、誰あろう坂上芳樹その人にであった。
　それが約10ヶ月前。
『あ、天野…なんで？』
『坂上…』
　ホテルから出てきたところを、よりにもよって鉢あわせてしまった。
　坂上にしてみても一人ではなかったので、偉そうなことは云えないが、少なくともまだ女連れだった。そして坂上芳樹が同室になったばかりの相手は、サラリーマン風の男と一緒だったのである。
　その場は互いに取り繕いながら、並んで帰寮した道すがら、天野はしかたなくことの経緯を坂上に話したのだった。
『…そっか、おまえもいろいろ大変なんだな』
　悪いことをしている…。そんな罪悪感があった天野へ、意外にも坂上は肯定的なことを云ってのけた。
『黙っていてくれるのか？』
　だが、天野の驚きと感謝の想いはすぐに、坂上の好色な瞳にかき消された。
『俺が買ってやるよ。街まで出なくても、俺の専属ってのでどう？　リスクも少ないしいい手だと思うぜ』
『金が入るのなら誰でもかまわないが。坂上こそいいのか？　そんな約束をしてしまっても』
『全然平気。小遣いだけで愛情のうすい家庭なものだから、金の心配はいらないぞ』
　そう告げて、ひょいとキスしようと迫ってきた貌を天野はおし退けていた。
『待った。唇へのキスはだめだ、それ以外なら目立つところに跡さえつけなければ何をしてもいい』
　その台詞に憮然として、ただ一言。
『なんでキスがだめなんだ？』
『決まっているじゃないか、せめてキスぐらい好きな人とのためにとっておきたいものだろう』
　その宣言のとおり、たどり着いた寮の自室で、天野秀軌は惜しげもなくその綺麗な裸体を坂上芳樹にさらしたのだ。
　あれから10ヶ月。
　いまでも腕にしている人は遠い…、と感傷にひたっているところを冷厳な言葉がさえぎる。
「坂上、もう放してくれないか。すこし苦しい」
「色気がないなぁ、すこしはサービスしろよ」
「時間外労働はしない主義だ」
　するりと坂上の腕を逃れて床におり立つ。ちょっと疲れたと云いたげに、天野はその場で両手をあげて伸びをする。
「…やれやれ…え？　坂上っ！」
　大胆に横抱きに抱えあげた躰を、手近な寝台に投げ下ろす。そして無言のまま、坂上芳樹は情人の着衣を脱がしにかかった。
「ま、待て！　約束が違うぞ、休み前しかしないんじゃなかったのか」
「しかたがないだろ、その気になってるんだから」
　メチャクチャな云い分である。
　ひらきなおっているずぶとい神経と、その





態度にのまれて反撃体勢が遅れた。
「よせっ…」
　着ていたシャツをたくし上げられ、じかに触れてくるその感触におもわず総毛だつ。
　体格でいったら圧倒的に不利だ。どんなにあらがってみても、結局はいつも坂上のいいようにあしらわれてしまう。
「よさ…ないか…」
「黙ってろよ。すぐに悦くなるって」
「誰がそんなこと…」
　無駄だとわかっていて、それでも抗議の念は消えない。いくら金で買われた身だとはいえ、理性の残っているこんな状況は我慢ならない。
（だから…イヤなんだ）
　週末ならいい。いつだとわかっていれば、それ相応の心構えができる。それに――。
（一日あれば、自分が取り戻せる……）
　いつからだろうか？　坂上芳樹に抱かれた後の、なんともいえない虚無感をこの胸にいだくようになったのは…。
「っ…」
　左胸の突起を舌でしつように刺激され、おもわず背がのけ反る。もれそうになった声音を抑えるのが精一杯で、じょじょに躰に力が入らなくなってくる。
「我慢するなよ、聴かせろよ」
　余裕があるのが腹立たしくなるほどの涼やかな笑顔でもって、己れを組み敷いている坂上芳樹は応じてくる。
「こ…の野…郎」
「痛っ、天野、痛いよ」
　思わずその背にまわした腕でかるく爪をたててやった。だが一向に懲りない男、坂上には通じていないようで、口では痛いようなことを云っているが、実際はしつこく胸のあたりをまさぐってくる。
　いつの間にか着ていたシャツはどこかに脱ぎ落とされ、ついでに履いていたスエットのウエストあたりをしつような腕ははいまわっている。
「坂…上、明日…試験があるんだ」
　往生際わるく、やっとの思いで天野はそう告げてみた。
「わかってる。ひびかないように痛くしないから、協力しろよ」
　ニヤリと笑って、いたずらな腕はスルリと履いていたスエットの内に侵入してくる。
「なっ…」
　まさに絶句。パクパクと二の句を告げようと無駄なあがきをしていたところを、自身にじかに触れられ、意識が吹っ飛びかける。
「あっ…さ、坂…が……」
　クウッとくぐった声音でしがみついてくる天野の姿に、余裕を演じていたはずの坂上も動悸がはげしく高鳴った。
　もどかしそうに、己れの着衣をかなぐり捨て、喘ぐように息をついている天野の下肢にその身を割り込ませる。
　しどけなく横たわったままの、天野の色白の肌が蒸気してほのかに紅く染まっている。
「力、ぬいて」
「…え？　あっ…やっ…」
　愛撫を前に集中させながら、長いその指で天野の最奥をまさぐっていく。反発するソコを、ゆっくりと熱にうかされていくように、やんわりとほぐしてやる。
「っ…あ…あんっ…坂…上…」
　なん度も抜き差しを繰り返すうちに、すっかり己れの欲望を忠実にしめしている天野の口から、息も絶えだえの台詞がもれる。
　この瞬間がたまらない。
　坂上の大好きな綺麗な貌が、全身で己れを求めてくるのだ。たとえ躰だけの関係だとしても、この瞬間だけは天野秀軌は自分の、坂上芳樹のモノなのだ。
「…天野」
　自身を天野が欲している部分にこすりつけ

てやる。ビクビクと互いの熱が跳ねあがる。

「天野っ」

グッと一気に己れを沈めた。

「あうっ！　くっ…あぁ……あっ…」

その熱いうねりを感じながら、坂上芳樹はおのれの腕の中で翻弄され乱れていく天野秀軌の姿に、めまいのような想いをおぼえていた。

## 2

新学期そうそうの学力テストは、生徒のその後の命運を左右する代物だ。その証拠に、試験結果により専攻科目のクラス編成がなされ、実力にあわせた教科対策が実施されていくのである。一ランク上のクラスに入ることが、ひいては成績そのものにも影響してくる。それだけシビアな世界が、ここ桐蔭学院においてでさえ実行されていた。

グラウンドを正面にみすえた本館二階、上級生よう昇降口よこの廊下には、先日おこなわれた学力テストの成績結果がはり出されていた。

はり出し組みはいずれの学年も、総合および各科目ごとに上位42名という中途半端な数字が成される。その選ばれた42人が、ひいては専攻科目クラスのトップであるAに入ることがゆるされるのだった。

登校してきた生徒たちが、その掲示板のようしゃない結果の前に群がっている。

「やっぱり天野が1位だ」

「すげぇ、全科目完全制覇だな」

「坂上もぜんぶ2番につけてるぞ」

口々に彼らご自慢の生徒会長と副会長の快挙をあげている。

彼らの学年において、毎回の試験ではり出される上位名簿のうち、1位と2位にかんしてはこの二年の間決して揺らぐことはなかった。そして三年目に入ったはずの今回の学力テストにおいても、その両者の名は変化することはない。

「3位以下をダントツで突き放しているんだからな」

「これでこいつら生徒会もきりもりしてるんだろ？　化けものだな」

「誰が化けものなんだ」

「さ、坂上！　脅かすな」

ふいに背後からあの長身が登場したものだから、掲示板に見とれていた方はたまったものではない。

「人の陰口をたたいているほうが悪い、どれ」

まわりに集まっている連中の、羨望のまなざしさえも何気なく受けながし、坂上芳樹はひょいと視線をはり出しへとはせる。

ひと通り瞳をうつすと、がっかりしたような声で感想を述べた。

「なんだ…せっかくの作戦も失敗か」

「作戦って？」

めざとく彼の言葉じりをとらえた生徒が問いただす。

「いや、天野にひとつくらい勝てるように、あいつの試験勉強を邪魔してやったんだがな」

信じられないようなことを平然と口にする。聞いていた者たちの方が、そのとんでもない返答に驚いて唖然としてしまう。

「ま、まさかそこまでするか？　普通…」

「何をしたんだ坂上？」

嘘だろう？　と、善意の解釈をしたい連中の瞳は訴えてくる。

「予算原案を長びかせたんだが…結局は俺もつきあっていたんだから、意味がないな」

坂上は鷹揚に笑って見せる。

「何だ…そ、そうだよな」

口々に安堵の言葉をはいているその集団を、





それを最後に坂上芳樹はやりすごした。

中央階段を四階までのぼり、3―2の教室へ。後方にある出入口から室内をのぞきこむと、すぐに坂上の目的の人物はその視界に入ってきた。

「天野、和英辞典かしてくれ」

ほがらかに坂上の声音。3組の彼がこうして辞書を借りにくることも毎度のことなので、居あわせた他の生徒たちもべつだん気にすることもない。

むしろ、グラウンドに面した窓から2列めの前から3番めという、教師には絶好の位置に座っている天野のほうが、露骨に迷惑そうに眉をしかめて戸口の坂上を眺めやる。

だがこれも日常。

やがて根負けしたかのように、うっそりと天野が席を立ち、あえて坂上とは反対の教室前方にある扉から廊下にある自分のロッカーまで行く。そしてロッカーから和英辞典を取りだすと、その場で坂上に向けて示してやる。

「たまには自分のを使ってみたらどうだ」

「持ち運びが面倒なんだ。それに、ちゃんと天野が持っていくのは知っているからな」

ぬけぬけと云ってのけて、さしだす辞書を受け取りに天野へと近づく。辞書を受けとる瞬間、教室や廊下にたむろする他の生徒たちには気づかれないように、坂上は声をひそめて問いただす。

「今朝も早かったんだな。メシ食ってないんだろう？」

傍目にはなんの変化もない怜悧な貌は、それでもいくぶん動じたような声音で応じてくる。

「…食べたくないだけだ。おまえこそ、済んだら自分のベッドで寝てくれ」

夕べの勤務をさしている。だからぐっすり眠れないのだと、その双眸は怒りを含んでもいた。

その天野の、ちょっときついような瞳を坂上は気に入っている。ともすればもろく崩れてしまいそうな儚い印象の美貌が、その双眸の輝きだけで、こうも異なるものに変貌をとげる。

いまでは他のだれも知らない、自分以外は知って欲しくない、天野秀軌という人物の本質を隠すための最高の武器。

（――――！）

坂上は内にはしった衝動を、かろうじて理性で抑え込んだ。

ここが天下の往来である教室わきの廊下でなければ、そのままこのプライドが高いわりには、自分の価値を知らなさすぎる男を抱き寄せているところだったのだ。

「なんだジロジロと、まだ何かあるのか？」

「いや、それより昼は一緒に食おうぜ」

「おまえの奢りなんだろうな」

「もちろん」

「それなら、付きあってやる」

くるりと踵をかえし、おのれの教室へと入っていってしまう。そんな身長のわりには細身の背をながめながら、自然と坂上の口もとには笑みがこぼれてくる。

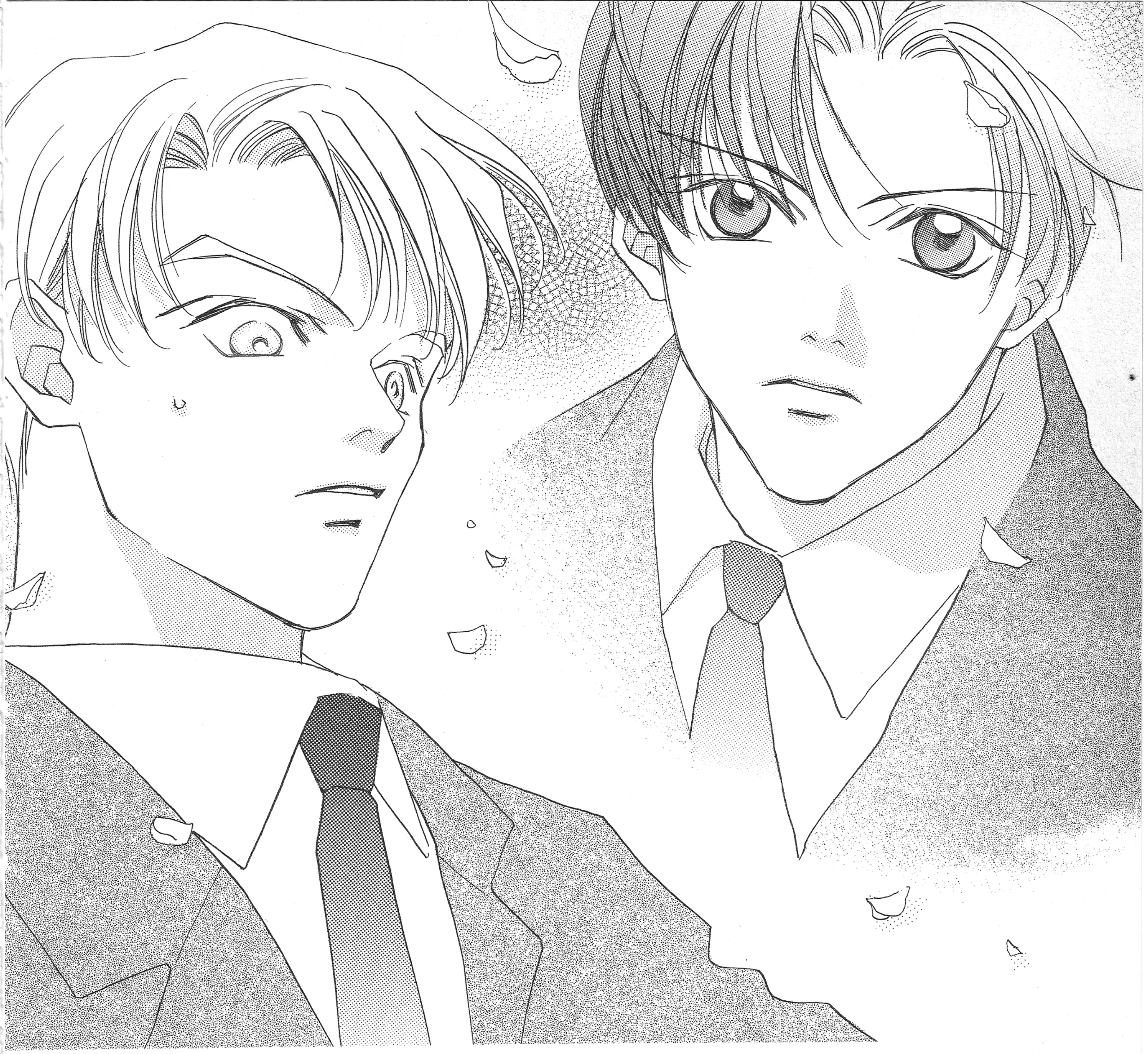
（俺も、そうとうだな…）

いささか自嘲の念。

好きになったのは、かれこれ二年前。もちろん当の天野秀軌は、そんなことを知るよしもないだろう。

幼稚舎からの生粋の桐蔭っ子である、坂上芳樹がはじめて天野秀軌に逢ったのは、桜の舞い散る高等学部入学式の朝だった。

いくら繰りあがりとはいえ、敷地はまったく異なるところにあるため、中等部からの人間でさえ毎年数人は迷子がでる。ましてや外様「武家社会の外様大名からきている異名である」の新入生にいたっては、無事に講堂までたどり着く数の方が少ない。



そんな敷地面積だけでも充分にめぐまれすぎている桐蔭学院の、桜並木の下で彼は……寝ていたのだ。

そのときのことは今でも昨日のことのように坂上は記憶している。

試験日以外にも下見などで幾度か訪れたことのある桐蔭学院である。いささか勝手しったる者のノリで、講堂までの近道である第二グラウンドから体育館わきを通る桜並木をひとり歩んでいた。

その坂上の足もとに、桐蔭の制服を身につけた、恐ろしく綺麗な貌が倒れていたのである。

『嘘、だろう…』

正確には規則的な吐息がもれていたので、彼は眠っているだけなのだが、あまりにも非常識すぎた。そして起こしたものかとためっているうちに、坂上はついその寝顔に見惚れていたのだった。

『……』

今日がなんの日で、どうしてこんなところに自分がいるのか？　そんな大切なことをすべて忘れ去ってしまうほどに、寝ていた天野にこころ惹かれたのだ。

『いま何時？』

『！』





人形のように眠っていたはずの貌が、とつぜんその瞳を開けて問いただしてきた。咄嗟のことで驚きと、そして何よりもその瞳のもつ怜悧で刺すような光になにも返せないでいた。

ギョッとしたまま動けないでいる坂上の腕をとり、その腕時計を確認すると、天野は憮然と告げたのだった。

『なんだ、もう終わってしまったな。君は迷子？』

おなじ一年のバッジを坂上の胸にみつけての一言。

『違う。講堂までの近道だったんだ…もっとも、終わってしまっただろうけど』

『ならおなじサボタージュ組だな。クラスは？』

『6組』

『俺は5組だ』

その台詞に、ちょっと坂上のこころは浮き立った。

『俺は坂上芳樹。君は？』

『天野秀軌』

それが認識。坂上がその名を噛みしめている余裕もなく、天野はすくりと根もとから立ちあがると、教室へと迷うことなく歩みだす。

その背をあわてて追いかけた。

二人そろって教室にたどり着いたときには、見事にそれぞれの担任教師からお小言をこうむった。だが天野は、しれっと一言。

『すみません、馴れないもので迷ってしまいました。途中で偶然彼と一緒になり、ふたりで学院を一周してしまいましたよ』

その貌で、照れくさいような笑みのおまけまで付けられた日には、誰だってかなわない。まさか桜の下で居眠りなどとは、夢にも思わないだろう。

そんな坂上の予感どおりに、両名は無罪放免されたのだった。

そして入学早々の学力テストにより、天野秀軌がただ者ではないことは、すぐに全校生徒の知るところとなった。

全教科完全制覇のトップ。中等部までは向かうところ敵なし、桐蔭の誇りとまで云われつづけた坂上芳樹の、それが初めての敗北。そしてその敗北は現在にまでいたっている始末だ。

負けたということよりも、自分に勝ったということに驚きがあり、そして天野秀軌に対する興味はますます深まっていった。

外様での入学。しかも、その頭脳をかわれた特待生ときている。そして寮生活。

どちらかと云うとなんの不自由もなく、坂上家ご自慢の次男坊という状態で育ってきた芳樹である。とりたてて良い子であったつもりはないが、人よりすこしだけ要領が良く、少しだけ悟りのはやい子だった。そして、ちゃんと親への安心も与えてやっていた。つまり甘えである。

わがままとまではいかなくとも、坂上の望みでかなえられなかったものはなかった。それだけ可能なものしか望まなかったということもあるが、仕事に追われる両親にとっては、何かしらをねだる我が子の姿が必要であり、それをかなえてやることこそが彼らの安心でもあったのだ。

その坂上芳樹がもっとも無理難題を云ったのが、他でもない、桐蔭学院での生活の保障であった。

坂上が二年に進級するさい、両親の海外赴任が持ちあがった。行き先はN・Y・―ニューヨーク―

ふつうならば、そのまま家族と別れてしまっても問題のない歳である。だが彼の両親は、できの良い息子をそのまま向こうの学校に入れ、ゆくゆくは長男の通うハーバードあたりを狙わせる目算でいたのだった。

がぜん芳樹は逆らった。

理由はただひとつ。天野秀軌と別れたくな

かったから。
　実際にはとなりの組の、たまに選択科目で同席するだけの、いつも自分の上に君臨する成績優秀な男にすぎない。
　あいさつや立ち話ていどならするが、残念なことにそこまでの仲であった。だがどうしても、そのまま別れてしまうのが惜しかった…。
　そして計算だかい男、坂上芳樹は知っていた。天野の寮での同室者が三年生であったことを。そしてひとり暮らしなどという面倒なことを持ちかけるよりも、いっそ寮に入ってしまった方が両親を説得しやすいということも。
　すべてが上手くいった。ただ一つのことをのぞいては……。

　せっかく同室になれたというのに、あいかわらずどこか一線をひいてしまっているような天野の態度にイラついていた日々。
　もちまえの性格と見かけのおかげで、それなりに異性にもことかかなかった芳樹にしてみれば、それはなかばなびくことのない想い人へのあてつけだったのかもしれない。見事に釣れた彼女と行くところまで行ってしまったその帰り、よりにもよって天野と出くわした。
　しかも、信じられないことに天野秀軌は男連れだったのである。
　脳天が叩き割られるほどの衝撃！　痛いどころではなかった。ただ苦しくて、そしてたまらなく悔しかった。自分がふがいなくて、あまりにも情けなかった。
　正直、天野ほどの人間が、好きで男に身をまかせるようなことをするとは思えない。かなりの事情があったにせよ、あのプライドの高い奴が、そんな屈辱に耐えているということ。その事実。
　だから坂上自身、その天野のプライドゆえに口にできなかった…本当のことは。
『俺が買ってやるよ』
　本当はすぐに後悔していた。そんなはずではなかったのだから。しかし自分の善意だけでは、決して天野は金を受け取りはしないだろう。そしてともすれば、今でも街へ出て自らを売っていたかもしれない。
　そんなのは嫌だった。
　勝手な想いだが、天野に触れていいのは自分だけのはずだった。あの桜の下で出逢った瞬間、あの日から、自分には天野秀軌だけだったのだから。それなのに。
　守ってやれなかった。気付いてやれなかった…。
　不甲斐ない男。だから告げれない、ほんとうの言葉は。
　そして、さらに障害。
『キスぐらい、好きな人とのためにとっておきたい』
　わかりきっていたことだけに、なおさらこれは坂上芳樹の胸には響いた。
　好きでもない奴とはキスはしたくない———あたりまえの定義を、天野は突きつけたのだ。
　そう、天野秀軌はいくど肌をあわせようとも、決して坂上芳樹に唇をゆるすことはないのだ。

3

　何かが、ひっかかっていた。

　まるで解けない難問をかかえているかのように、ここ数日の、天野秀軌の胸中は晴れない。
　自分ではすでにその答えがわかりかけているようでもあり、それでいてあえて答えを導





きだしてしまうのを恐れてもいる。
（恐れる？　俺が…？）
　ハタと数学の問題集をめくりかけていた手がとまる。そして憮然としてしまった。
「馬鹿ばかしい、どうしてそんなこと……」
　思わず、口をついて出る。
　土曜日ということもあり、午後から外出や帰宅する生徒ばかりで寮内は閑散としている。幸いにして同室であり、この晴れない胸のもやもやの原因でもある坂上芳樹も不在であった。
　そしてその不在こそが、天野のこころを苛んでいた。
　今日、昇降口で坂上を待ちかまえていた新入生は、あの生徒会室での相手だった。浜崎といった可愛らしい貌だちの一年生は、憧憬の念を隠そうともせず、嬉しそうに坂上と連れだって出かけていったのだ。
　坂上が誰とどこに行こうとも、それは彼の自由だ。
　生徒会の仕事も一段落したいまとなっては、天野には坂上をとどめておく術はない。ましてそんな権利も自分にはないのだ。
　今さらながらに、天野秀軌は後悔していた。
　どうして自分は坂上に抱かれることを承諾してしまったのだろうか…？　と。
　自分の惨めでなさけない姿を見られたという弱みもあった。だが、坂上はそんなあさましいおのれを軽蔑するようなことはしなかった。それに——。
「……」
　ふいに蘇るのは生徒会室での一件。坂上が他の人間を腕にしていた光景。あのキスシーン。
　たぶん気づいていた。
　あの瞬間、胸にはしった痛みのようなものがなんであったのかを。
　そして、以前ならば一夜かぎりで決しておなじ人間には自分を買わせなかったはずが、なぜか坂上の申し出には応じていた。そんな自分のこころに。
　弱みをにぎられたとか、彼の口を封じるために共犯者に仕立てるためだとか…そんな理屈をならべてみても、こころは誤魔化せない。
　これは天野秀軌にとっても驚きであった。
　すでにわりきっていたはずの関係のなかで、まさか自らがその罠に嵌まってしまうとは思いもよらなかった。
（よりにもよって…）
　自分は、天野秀軌は坂上芳樹に恋をしている。
　すでに汚れきった躰の持ち主で、そういった綺麗な感情などとうに失くしたとばかりに思っていた。そんな最低な人間のはずなのに、ちゃっかりと自分は坂上に惹かれている。恋している。
　たぶん、そうこの気持ちこそを『好き』というのに違いあるまい。

　廊下に人の気配がしたと思ったとたん、すぐにドアが開き、坂上芳樹が入ってくる。
「ただいま」
「…おかえり」
　ちらりと机ごしにその貌をながめるだけで、天野は内心の葛藤とはべつに、その整った面にはなんの憂いもあらわしはしない。
「ほら土産だ」
　上着を脱ぎながら、コンビニの袋を投げてよこす。
　受け取った天野はその中身をのぞきこみ、いささか意外そうに着替えている坂上に声をかけた。
「なんだこれは？」
「カロリーメイト」
　袋の中身は黄色い箱が三つ。
「そんなことは見ればわかる。どうしてこんなものを買ってきたんだ？　おまえ学食で足りないのか」

規定の食事でたりなくとも、坂上は購買でしっかり菓子パン類を購入しているのを知っているだけに、天野にはこの買い物は不思議でしかない。
「おまえ用だよ、天野」
「え？」
「おまえ俺に抱かれた翌日は、食堂が開く前にさっさと登校しちまうもんな。食べたくなくても躰にはなにか入れておけよ、ただでさえ細いんだからさ」
　坂上の口にした『抱く』という単語が胸を痛めた。
　だがそのようなことは微塵も感じさせず、天野は抑揚のない声音で一言。
「そうか、次からはチーズ味だけにしてくれ」
　そう告げるや否や、もう興味はなくなったと云いたげに、さっさと机に向きなおってしまう。その姿は坂上には、とりつく島もないようにしかうつらない。
　大げさにひとつため息をついてみせるが、残念ながら生徒会長殿には通じない。
「…なあ、連休にどこか行かないか？」
　気をとりなおしてちょっとずうずうしく、問題集に向かっている天野を背中ごしにのぞき見る。あとほんの数cmで頬が触れあうほどの急接近。
「連休？　本気で云っているのか」
　手もとのノートから視線を外すことなく、天野はこのとつぜんの申し出を尋ねてくる。
つぎの週末は翌月曜が学校法人『桐蔭』の創立記念日で連休になるが、中間試験が近い時期でもあり桐蔭生にとってはあまり功をそうさない休日のはずだ。
「本気も本気。じつは…ほら」
　どうだ、と天野の瞳のまえには旅行会社のクーポン券がしめされる。
　自信満々の坂上に対し、あきれた奴…と侮蔑の表情で天野は応じてやる。だがその手は、しめされたクーポン券の内容確認にはいっていた。
「神戸…」
　中身は土曜日の午後出発の新幹線指定席の切符、その行き先は神戸とある。そしてきわめつけが、めくった次が神戸ポートアイランドにあるシティホテルの宿泊券。しかも二泊とそこにはある。
「本当は近場の横浜ぐらいにしときたかったんだが、万が一知った顔にでくわしたら困りものだろ。ま、そういうわけで、復興協力もこめて神戸観光にしました」
「何がそういう訳なんだ。だいたい俺がおまえに付き合うと思っているのか？」
　あきれた心境がそのまま声音に出た。
「付き合うさ。せっかくのクーポン券を無駄にするほどおまえは馬鹿じゃない。それに——」
　がばっ、と肩ごしに背後から天野を抱きしめ、その耳もとにそっと囁く。
「まわりに気兼ねなく、天野の声が聴きたいからな」
「なっ」
　とっさに染まった頬をかくす手だては、天野には残されていなかった。しかたなく、憮然としたまま、しがみついている坂上の腕をきり離す。
「云っておくが、代金がもったいないからだぞ」
　そう告げて机の問題集を閉じると、さっさと自らの寝台へともぐり込む。すこし深めに布団をかぶり、いつもの表情をとり戻そうとするが、今夜にかぎってはそれが巧くいかない。
　そんな天野のらしくないさまに、坂上は嬉しそうに微笑む。残念ながら、布団をかぶってしまっている天野には、その優しさに満ちた笑みは届くことはないが。
「すこし、詰めろよ」





え？　と困惑しだす間もなく、天野の横にとうぜんの権利のように坂上が侵入してくる。
「ちょ、ちょっと待て！　おまえ、風呂まだだろうが」
「におうか？　汗かいてないんだがなぁ」
　着替えたばかりの室内着を脱ぎながら、くんくんと自らの腕に鼻をおしつけて、悪びれることなく告げてくる。そして、怜悧な貌を隠してしまっている布団を無理やりまくりあげ、裸体をすべりこませた。
　壁ぎわに追いやられたかたちの天野には形勢は不利でしかない。しかも容赦なく、坂上の腕は着ている長袖Tシャツをたくしあげ、直に肌に触れてくる。
「おい、坂上っ」
「なんだ。後にしろよ…」
　触れてくる手を上からおさえようと努めるが、無駄な努力にしかならない。やがて、すでに慣れすぎているその愛撫に、天野は自らその身をゆだねていった。

もう、やめよう……。
　その決意の言葉は、喉をついては出ない。必死に下肢からわきおこる波によってもたらされる、漏れた声音をおさえながら、天野はずっと考えていた。
『こんなときに考え事なんかするなっ！』
　と、そんな坂上の叱咤が聞こえてきそうだが、ありがたいことに彼の方は作業に集中しているようで気づかない。
　理性を保っていることがしだいに困難になってきた。いくら頭では割り切っていても、躰はいうことをきいてはくれなくなってくる。
　そしてそんな自分を乱れさせる腕が、名も知らない男たちから、坂上芳樹というちょっと尊大な態度の同期生に代わってからというもの、日増しに天野秀軌の内で難問とかしているのだ。
　だから…。
（嫌だ。これ以上、坂上には抱かれたくない……）
　自らがまいた種とはいえ、もはや坂上に感情を無視したまま抱かれつづけることは苦痛でしかなかった。
　気づいてしまったのだから、自分のこころに。
「…や…あっ…イヤ…」
　ふいに涙。いくどとなく突きあげられ、理性さえも崩れていく。目尻からこぼれたそれを、ひどく優しい仕種で吸いとられた。
　それが天野の最後の記憶。
（余裕なんて、あるわけがない）
　いささか自己嫌悪に陥りながら、坂上芳樹は胸中でそう呟いた。
「天野…死んでるのか…？」
　恐る恐る、そっと隣に横たわっている姿をうかがい見る。
　見下ろしたそこには、微かにつたわる吐息と涙に濡れた白い頬。
「……」
　その頬に触れようと翳した腕は、むなしく宙に浮いたまま。
（まいったな、また泣かした…）
　いつもこうだ。嫌がっているのを、なかば強引に。しかも相手は自分の想い人だというのに。
（俺って、サイテー）
　これでベッドの上で余裕なるものがあったのならば、もう少しましな恋愛ができると思う。どうすることもできないから、結局はこんなコトでしか天野秀軌を繫ぎとめておけないのだ。
　言葉にできないのなら、態度でしめすしかない。好きなのに…云えない。
　口にしてしまったが最後、壊れてしまう関

係ならば…たとえどれほど虚しくても、天野を独占できるいまのままが良いに決まっている。

「…ほんとう、最低だよな」

ぼそりと呟くと、坂上はそっと寝台をおり、バスルームへと歩を忍ばせた。

※

目覚めたとき、とうに脱がされたはずの衣類をまとっていることが不思議だった。

部屋の反対側にある寝台には、その主はいない。かわりに備付けのユニットバスからの水音が微かに伝わってくる。

ほどなくして、バスタオルで下肢をおおっただけの濡れ髪姿の坂上が出てくる。

「起きたのか」

「ああ、おまえが着せたのか？」

「風邪ひくだろ」

「よけいなことだ」

ぶざまに意識のないまま、いいように坂上に扱われてしまったことが腹立たしくもあった。

ちょっとふてくされたような雰囲気の天野へ一瞥(いちべつ)をくれただけで、坂上は濡れた躰をふき寝巻がわりのスエットとTシャツを身につける。そして一連の作業を終えると、一瞬身構えている天野をよそに、おとなしく自らのベッドに入った。

「消すぞ」

「さ、坂上…話がある」

室内灯はすでに消されているが、枕もとのスタンドの明かりは、あかあかと天野の姿をあらわしている。

「なんだ？　明日じゃだめか」

「…もう、やめにしないか」

坂上芳樹には天野が口にしたいまの台詞を理解するのに、たっぷりと数十秒はかかった。

「へっ？　なに…」

とてもじゃないが、仮にも双璧という異名を唱えられた片割れとは思えないほど、なさけない表情を坂上は演じた。

「おまえとの契約を、終わりにしたいんだ」

まっすぐ、ゆるぎなく怜悧な瞳はもの語ってくる。坂上の好きな、他を一掃してしまうほどの威力をもつ天野の双眸。

「どうして、そんなにきつかったのか？」

つい抑制がきかなかった先刻の自らの若さを思い出していた。

「違う…そうじゃない。ただ、もうそれほど金を稼ぐ必要がなくなったんだ。それに俺たちは三年だろ、上にそのまま行くにしても、ここらで受験に集中したいんだ」

一気に口にできたことを天野は感謝した。

大丈夫だと、坂上に気づかれてはいないと……。

「そ…うか、なら仕方ないな。だが神戸には行ってくれるんだろ？」

親しんだ躰を手放すことを、坂上はすこし残念そうにしてくれた…天野にはそう見えた。それだけで、もう充分だった。

「ああ、もったいないからな」

「なあ…最後の出血大サービスで、神戸まで持ち越しにしてくれよ」

拝まれてしまっては折れるしかない。一応スポンサーは彼なのだから。

「わかった。そのかわり、旅行までは俺に触れるな」

そんな殺生(せっしょう)な、という坂上の抗議はついぞ受け入れられることはなかった。

4

視界の果てには深い海。大きな貨物船がゆったりと青い波をおして進んでいく。そう思うと、振りむいた反対側では、すぐ山岳のま





ぶしい緑が飛びこんでくる。

海と山をもつ街。ひらけた港のイメージからか、そこかしこで異国情緒が匂いたつ。

激しい震災の傷痕は、未だに残されてもいるが、それでもこの街は生きている。着実に、生き残った人々とともに、破壊された街も以前の栄華をとり戻そうという活気に満ちている。

世間では普通の週末のはずであるが、観光地としての神戸(こうべ)は、復興への足掛かりとともに、かつての名に恥じないほどの盛況ぶりをしめしていた。

土曜日の夕暮れどき。午前中の授業がまるでつくりごとだったかのように、坂上芳樹(さかがみよしき)の強引な行動力により、両者は神戸まで来ていた。寮を出てからかれこれ四時間半後のことである。

「疲れたか？」

ひょいと坂上が天野(あまの)のぶんの鞄まで持とうとしたので、あわててそれを制す。

「いや、大丈夫。思ったよりもはやく着くんだな」

「交通機関は完全に復旧してるからな」

「そうだな。ここからは？」

「観光なら三宮(さんのみや)あたりからはじめるんだが、今日は神戸に入ることが目的だから、べつに決めていない。とりあえずホテルまで行って、そこで食事かな」

「そうか」

とりたてて興味もわかないものなのか、それともわざと気にかけていないような素振りを見せているのか、天野はまるで他人事のように坂上の言葉を聞いている。そんな姿に坂上もすでに慣れたものなので、これといって異を唱えるような無粋なこともしなかった。

ターミナルの乗り場からタクシーで、二人はポートアイランドにある楕円(だえん)形の高層ビルまで移動した。

「ふ～ん」

「いいだろ」

おりしも黄昏(たそがれ)時。

高層ビルの不可思議な楕円のシルエットと、まわりの建造物の洗練された影。そしてふり仰いだ夕闇の空にはモノレールの姿。

都心からは一時間以内という立地条件のわりには、その広すぎる敷地と豊富な緑たちの存在のために、どこか世間とは隔離された山奥の隠遁(いんとん)生活を連想させる桐蔭(とういん)学院。そこでの生活が二年以上も続いたせいか、この光景はかなり天野のこころを喜ばせた。

ちょっと不思議そうにぐるりと周囲をながめやり、そしてあらためて坂上を見やる。

「なに？」

そのいつもとは異なる光の瞳にどぎまぎとして、坂上は尋ねてみる。

「うん、なんか不思議な世界だ。こんな時刻のせいかもしれないが、まるで映画のセットの近未来のような光景だ」

「それ云えてる。未来都市って、こういうのを云うのかな」

「そうそう」

めずらしい表情(かお)。学院ないではついぞ拝むことのゆるされないたぐいの笑顔でもって、この街に対する意見の同意を天野は示していた。

「い、行くぞ」

その姿に魅せられていた自分に気づくと、坂上はすこし大げさに声をあらげて促した。

ベルボーイに案内と荷物の礼をのべてさがらせたのち、ちょっと自慢気に坂上は同行者へむけて云いつのる。

「どう？　なかなかだろ」

「確かに…」

「寮とは比べものにならないな」

同じほどの広さでありながら、彼らの生活している空間との違いをしみじみと感じいる。

「でも坂上、もったいないな。それこそ無駄づかいにもほどがある」

いつものとがめる生徒会長の口調。
「それがだ、フフフ」
クローゼットから室内履きをとりだし、くつろぎながら坂上芳樹はしたり顔で笑っている。
「なんだ気持ちの悪い」
「いや、本当は黙っていようかと思っていたんだが…まあそれだと天野が心配するから、白状するか。じつは今回の旅行は正規の代金の3分の2の料金なんだ」
いたずらっぽく笑ってみせる。
「オフシーズンでもないのに、まさか」
「本当。ほらこの前の浜崎おぼえているか？」
何気ないはずのその名に天野の頬は微かにつっぱる。だが、その微妙な変化を坂上は気づかない。
「生徒会室にいた一年か」
「そうそう。あいつの兄貴が旅行会社に勤めていてさ、まっ、そのおかげでこうして格安になったわけだ」
「どうして…」
すこし落ちこんだ声音にも坂上は気をとめない。自分の手柄を褒めてほしくて、喜んで欲しくて、ついつい陽気に続けていく。
「一部社員割引ってわけ」
「ちがう、そんなことをきいているんじゃない。どういうつもりなんだ？　まさか俺とのことを浜崎に教えたのか？」
険しい表情になっていく天野秀軌の姿に、やっと坂上も気づいた。
「まさか！　どうしてそんなことを云うんだ。ただ友人と旅行したいからいいところないかと、聞いただけだ」
「そんなプライベートなことまで話しているのか」
ちょっと驚いたような表情をみせたが、天野の美貌はすぐにいつもの、いや普段以上にとりつく島もないような冷厳な貌にもどっている。
「べつに大丈夫だぜ、あいつとは中等部からの付き合いだし。それにあれこれ詮索するような奴じゃないさ。そんな奴なら俺は相手にはしないし、あいつ良い奴だぞ」
「そうか」
坂上の口からは、天野秀軌の聴きたくなかった言葉がつぎつぎともれてくる。知らなかった…知りたくなかったことを教えられる。
沈黙してしまった天野の姿にいぶかしみながら、坂上は尋ねてみる。
「俺が、おまえとのことバラスとでも思ったのか？」
「ああ…そこまで浜崎と親しいとは知らなかったからな」
「あいつは後輩で――」
「食事、行くんだろ」
天野はあえて坂上の言葉をさえぎり、そこでこの不毛な会話を無理に終わらせた。

※

到着した際の浮きたつような気持ちが嘘のように退いてしまっていた。そして天野秀軌の脳裏には、あの生徒会室での情景が浮かびあがる。
坂上の腕が見知らぬ人を抱いていた。逆光からのシルエットが、なおのことその二人を浮き立たせていたような、誰も入りこめないような……。
（嫌だ！　イヤだ…）
ホテルの備品である寝巻がわりのローブに身を包んだ姿で、天野は寝台に腰掛け坂上を待っていた。
とうの坂上はいま浴室を利用しているのだが、あと数分もすれば天野を抱きにやってくる。あたりまえのように過ごしてきた日々ではついぞ感じなかった想い。その『嫉妬』と呼ばれるものに苛まれながら、天野秀軌はた

だ待っていた。坂上芳樹を。

そしてこの胸が痛くなるような想いとの決裂を。

約束では今宵を入れて、あと二晩。先がみえている関係の、本当の終結がやってくるのだ。

天野は、そう自分でしむけておきながら、ひどく己れが惨めにも思えた。

ガチャッ、という音とともに濡れ髪をふきながら坂上がバスローブ姿で出てくる。

「どうかしたのか？」

めずらしく横になることなく、寝台に座り込んでいる天野へ声をかける。

「いや、なんでもない…」

（おまえは、知らなくてもいいことだ…）

その本音は決して言葉にはならない。

髪を拭いていたバスタオルを手近な椅子の背になげかけると、坂上はそっと瞳のまえの自分よりはかなり薄い肩に手をかけた。

「いいか？」

その神妙な声音に、おもわずフッと笑いがもれた。

「嫌だって云ったらやめるのか？」

「やめない」

確たる応え。

「だったら聞くな…」

天野が云い終わらないうちに、どさりと長身の躰が覆いかぶさってくる。

その広い背に両の腕をまわしながら、ふと天野は自分の感情が喜びで満ちていることを思い知った。

（ああ、そうか…）

多分これが普通なのだろう。好きな人に抱きしめられて、ドキドキしない方がおかしいのだ。きっとこういうときめきのような、熱い想いこそが大切なことなのだろう。

まったくの逆で、それこそ肝心の手順をすべて踏むことなく終わってしまう恋でも、ひどく幸せになれるものだと、怜悧な瞳は笑っていた。

「…え？　さっ…坂上…」

すっかり纏っていたものを脱ぎ落とされ、ひどく無防備すぎる姿でおとなしくその腕に身をまかせていたはずの人が、うろたえたような声音で抗議しだす。

がっしりとした腕にあられもなく開かれた下肢をとられ、その中心に息まくものをはぐらかすかのような愛撫がつづく。

「なに？」

ふわりと幾分腕の力を抜いて問いを発してみるが、もちろん作業の手は休めない。わざと肝心の部分には触れないで、内股のあたりを彷徨っている。

あきらかに天野自身をたかめるのがその腕の目的であった。

「…よ、よせよ…そんなこと」

「なんで？　いいんだろ、声だせよ」

「ば…馬鹿野郎…あっ…」

ギュッと強く触れられ、思わず息がつまる。そんな天野を逃さないかのように、坂上の腕は激しくスライドする。

「っ！　…よせっ…」

切れぎれになりながら、必死の声音での抗議。もちろん効果はいなめない。

ひどくしつようで、それでいって優しすぎる腕に天野は翻弄され、そしてほどなく頂点を極めた。

「あっ……」

ハアハアと息をつきながら、横たわったままの身を捩る。無駄とわかっていて、いまのみっともない貌を坂上には見られたくなかった。

それでも捕らわれたままの下肢を閉じることはゆるされない。

「大丈夫？　どこか痛むか？」

「さか…がみ…？」

心配そうな瞳がのぞき込んでくる。それこそいく度となく躰を重ねた関係であったのに、





こんな風に扱われたのは初めてだ。

坂上の意外な変貌に戸惑いながら、そっと視線をからめた。

（———！）

ドクンッ、と天野の内でなにかが弾ける。

それこそ、嫌というほど良く知っている奴なのに、ふいにまったく知らない人のような貌をする。

（…ズルイぞ、おまえ———）

「……ルール…いは…んだ…」

「なに？」

朱に染まったままの天野の囁きは、坂上には届かない。

そして問いかけながらも、その返答を坂上も期待してはいなかった。そのまま、いくぶん息の落ちついてきた天野に対し、今度はキスの嵐を全身に贈る。『唇』という唯一の許されない場所をのぞいて。

「んっ…」

頬やこめかみ、そして項をはい、いたずらなキスは胸もとへとつづく。坂上芳樹の所有の証が天野の全身へと刻まれていくのだ。

ついぞ味わったことのないような、優しくてしつような波に、天野秀軌はさらわれていた。

（熱…い……）

すでにどこかはっきりしない頭で、ぼんやりと己れに奉仕している存在を見つめる。ゆっくりともたげた手は、精悍な頬に触れ、そしていつも己れを翻弄する腕へとおりていく。

まるで確かめるかのように、坂上の頼もしいような肩や腕、そして自分とはくらべものにならないような厚い胸板へと指を這わせた。

（さかがみ…よしき…？　さかが…み…）

「…が…み…」

「どうした…ツライのか？」

「ちが…う」

伝わらないのがもどかしい。伝えたいのに、もっとも近くに居るはずの人は遠い。

もどかしくて、悔しくて…熱にうかされた瞳が潤んでくる。

（どうして……）

泣きたいような気分だった。

きっと、もっとも大切な人なのに。その坂上に抱かれているというのに…伝えられない、本当のことは。きっとかなわないから、壊したくないから…大事だから…とっておきたいから……だから。

（お終い———）

「…なんだ…な」

「天野…？」

さすがに怪訝そうに坂上が尋ねてくる。

そんな姿に苦笑しながら、天野秀軌はちょっと大胆に相手を誘ってみることにした。

「こいよ…坂…上、きて…」

羞恥にそまりながら、そっと坂上を迎えるために膝をひらく。ひどく恥ずかしくて、そしてとても幸せな一瞬。

「ごめん、天野っ…すこし、我慢して」

すこしだけ余裕のなくなった坂上が、急かされたように、双丘の奥へと指をさぐる。

触れた秘所を丹念になだめながら、すこしでも天野の負担がかるくなるための作業に従事しだす。

「あ…んっ…」

だがそんなコトにも感じてしまうのか、天野の口からは熱い吐息とともに濡れた声音が飛び出してくる。

「やっ…」

「もう少しだけ…ね…」

自分だけが感じてしまうのが嫌なのか、駄々をこねだす天野をなだめるように、何度もその耳もとへと坂上は囁きつづける。そして…。

「いい？　天野…いくね…？」

「…うん」

息をあわせて、そっと押し入る。

「あっ！　あぁ……あんっ…」
　坂上があたえた熱なのか、天野がもたらす波なのか…？　あつくて、激しいモノに二人は呑みこまれていった。

※

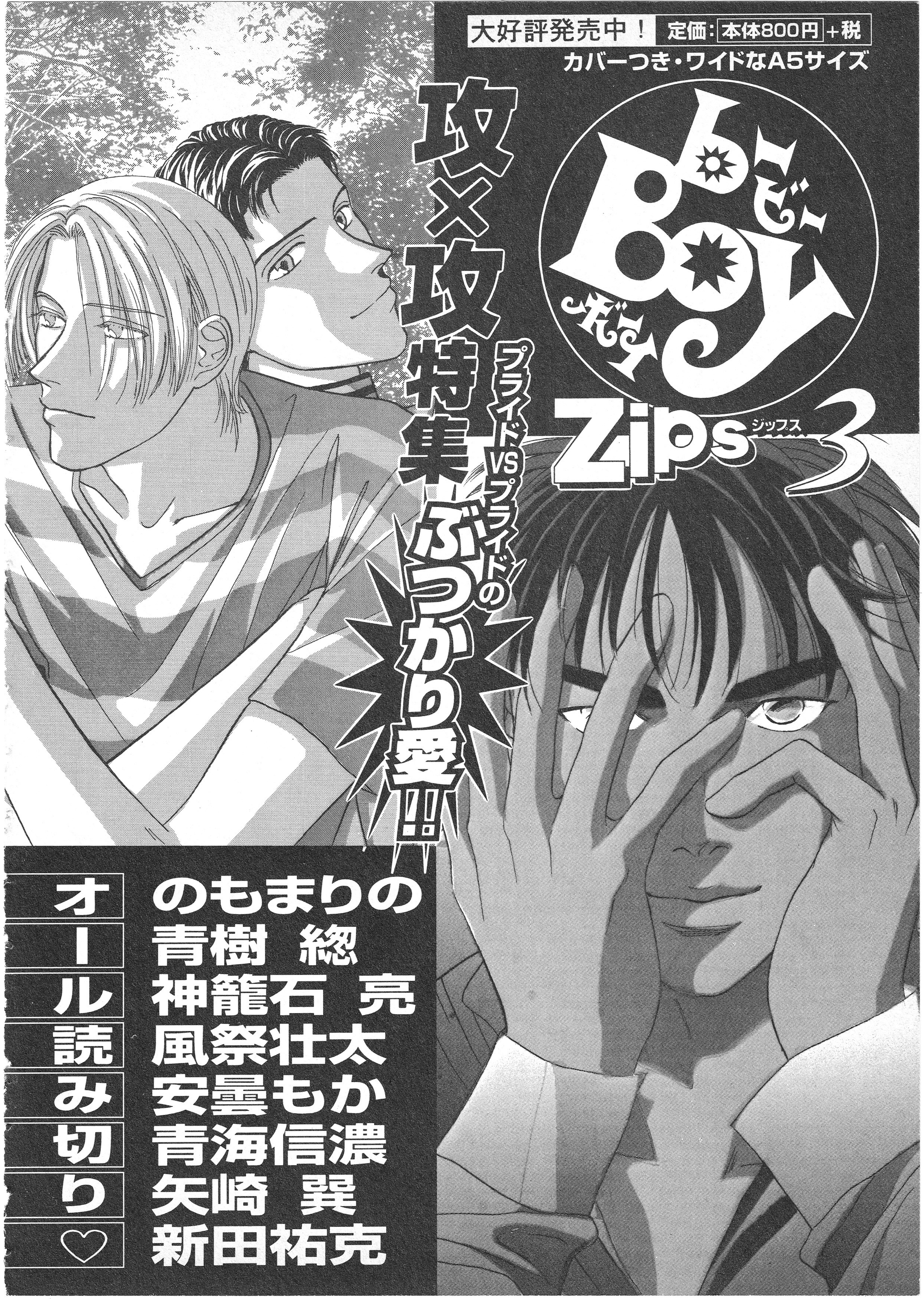
　しんと静まりかえった薄闇のなかで、天野秀軌はじっと、おのれの横で眠りについている坂上芳樹の貌を見入っていた。
　そこには眠りにおちる前の激しい交わりが嘘のように、ただ明け方の静かな空気だけが満ちている。そしてそっと規則的に伝えられる、坂上の吐息だけが聴こえてくる。
　優しい腕だった。
　まるで恋人相手でもあるかのような、そんな儚い夢さえ見せてしまうほど、昨夜の坂上の腕は優しく…そしてとても大切に扱われた。
　その優しさを、すこしだけ天野は怨んでもいた。
（…優しすぎるから）
　もしかしたらこの男なりの労りだったのかもしれない。彼の優しさを天野はそう解釈した。
　そうでもしなければ、とんでもない誤解を招いてしまうほどの、自惚れにもほどがある想いばかりが胸に募るのだから。
　ふと視線がとらえたのは肉感的なラインの坂上の唇。
「……」
　そして、オーバーラップする生徒会室でのあのキスシーン……。
　そっと音をたてぬように貌をよせ、天野はその整った唇を坂上のそれに合わせた。
　軽く触れるだけのキス。
　坂上芳樹との初めての接吻。
　離した唇から、無意識に抑えていた想いがもれでてしまうのを、もはや天野には止める術はなかった。ただ囁くように眠る人へ、ついぞ口にはできなかった想いを告げた。
「…おまえは、知らなくていい……もっと早く逢いたかった。まだ汚れていないころなら…これでも少しは自信があったんだぞ」
　眠っている貌を覗き見ながら、再びその面を沈めていく。
　唇が触れるか触れないかのうちに、再度。
「───好きだ」
　その言葉が放たれたとおなじに、天野秀軌はもう一度、眠っている想い人へ口付けた。今度はすこしゆっくりと。
　静かに身を離そうとした途端、ガシッといきなり躰にしがみつかれた。
「───!!」
　驚いて瞳をみはる天野をよそに、眠っていたはずの坂上が、捕らえた躰をそのままベッドに押さえつける。
「さっ、坂上！」
　驚きと抗議の入りまじったその台詞は、容赦のない激しい接吻にさえぎられた。
　ともすればその波にのまれてしまいがちになるところを、天野はかろうじてきり離す。
「な、なにするんだっ」
「先にしてくれたのは天野だ。光栄だな、とっておきだったんだろう？」
「…いつから起きていた」
「おまえは知らなくていい、から」
　つまり初めから……。毅然とした怜悧な印象のはずの貌が、みるみる真っ赤になっていく。
　そんな手に取るようにわかる情人の変化を前に、坂上もすこし戸惑ったかのように慌ててつけ加える。
「仕方ないだろ、本命と添い寝なんて状況で、そうそうおとなしく眠っていられるほど大人じゃないんだからな」
（本命…？）
　我が耳を疑うような単語がとび出した。い

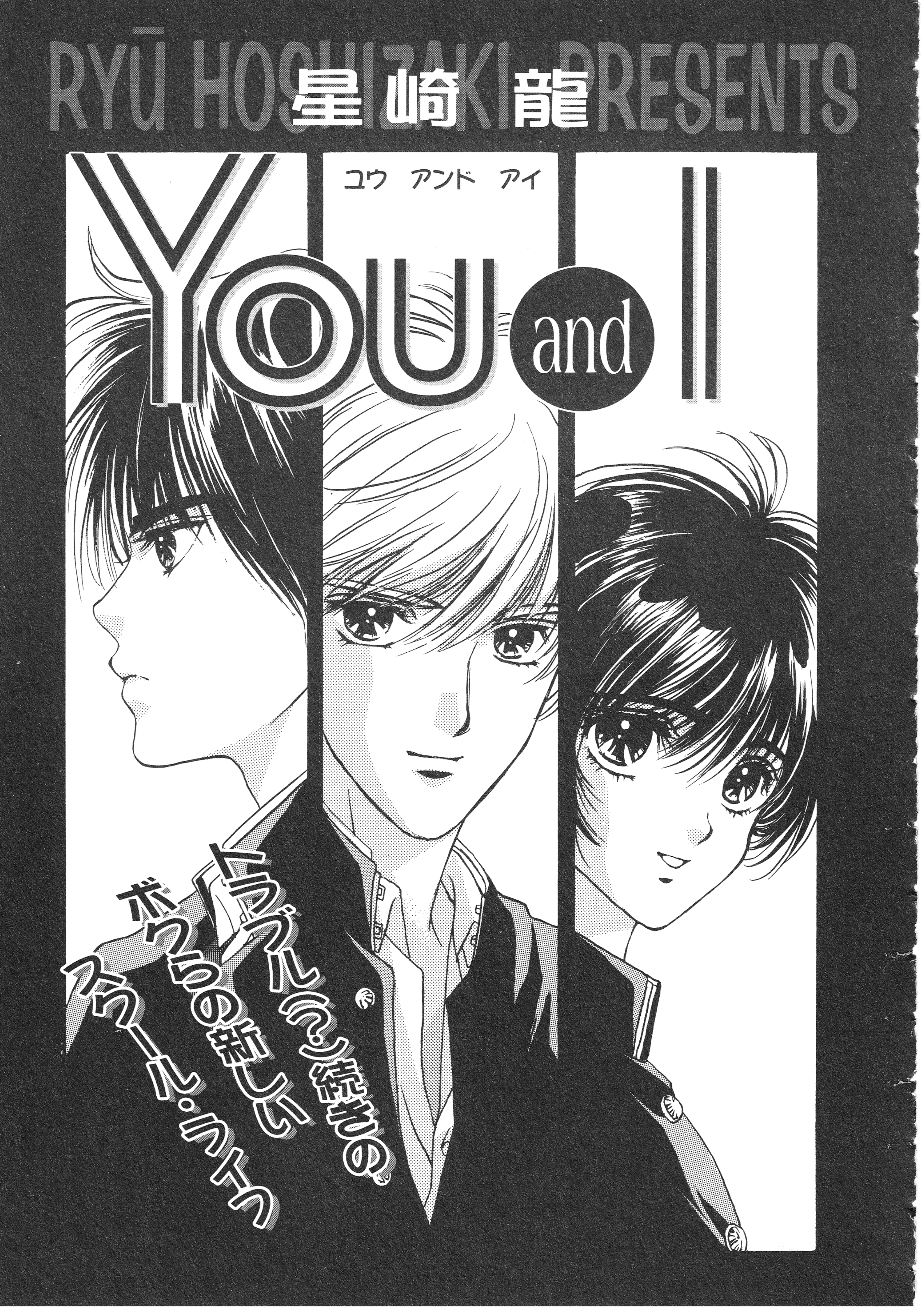




ま坂上はなんと云ったのか？
　天野は呆然とその言葉の意味を反芻する。
「と、いうわけで───責任とれよな」
　呆然自失の天野をよそに、悪びれない態度で坂上は腕にしている躰をさらに抱きこもうとした。
「ま、待て坂上、もうこんなことは辞めるはずだ」
「契約はね。…好きだよ、天野。はじめから、ずっと」
　見つめあったその瞳。
　上からのぞき込むようにして見入ってくるその真摯な瞳に、思わず天野の胸がドキンと高鳴る。
「なっ…」
　絶体絶命の体勢で、しかもあきらめていたはずの想いまでもが報われたのだ。抵抗なんて無駄なあがきにしかならない。
　そんな天野の心情まで盗み見たかのように、坂上はいつも以上の大胆さをともなって、腕にしている人にキスするために身を沈めた。
　もっとも綺麗で、神聖な儀式。
「…金銭契約は破棄でも、恋愛関係はこれからってことで」
　接吻の余韻にうち震えている天野に、ちょっとキザに諭してみる。
「で、でも…」
　いまだ往生際の悪い姿に、さらに。
「大丈夫、受験に響かない程度にするって」
　にやりと笑って応えてやる。
「よ、芳樹っ」
「はじめてベッドで名前を呼んでくれたな。嬉しいぜ、秀軌♡」
　坂上の腕のなかで、すっかり仮面の剝がれてしまった天野の面は、ただただ赤く染まっていくばかりだった。

END


大好評発売中！ 定価：本体800円＋税
カバーつき・ワイドなA5サイズ
BOY Zips ジップス 3
攻×攻特集
プライドVSプライドのぶつかり愛!!
オール読み切り♡
のもまりの
青樹 総
神籠石 亮
風祭壮太
安曇もか
青海信濃
矢崎 巽
新田祐克


RYŪ HOSHIZAKI PRESENTS
星崎龍
ユウ アンド アイ
YOU and I
トラブル(?)続きの
ボクらの新しい
スクール・ライフ

霧島周一様
こんにちは お久しぶりです
お元気ですか?
僕も春から高校生になります
霧島先輩のいる城東高校に
受かったのでまた後輩として
おせわになりますので
よろしくお願いします
(迷惑かもしれませんが…)
P.S.先輩に会える日を
楽しみにしています
阿部 稔
阿部…?
阿部ってあのチビの稔か…!
へえ…本当に俺のいる高校に来るとはねぇ…

あれから2年か…
なつかしいな……
先輩 卒業おめでとうございます
おう…!稔 お前もこれから頑張れよ
―――…
…?
どうした?
う…っ僕…
ポロ
ポロ
先輩がいないとさみしいです…っ

おいおい
泣くなよー
これから
お前も先輩に
なるんだから
しっかりしろよ
…な？
ぐすっ
うう〜〜
先輩…あの
お願いが
あるんです
記念に制服の
ボタン…下さい
校章でもいいです
…こんなので
いいのか？
…はい！
ありがとう
ございますッ
2つ年下の
小さな後輩
ちょっとトロくて
あぶなつかしくって
ほっとけない奴だった
僕も高校生に
なったら…
先輩の高校に
行きますから〜
うあああんっ
何故か俺によく
なついてたっけ……

城東寮
俺は学校の寮に
はいっちまったから
あれから会ってないけど
あいつ少しは
大きくなったのかな
2年ぶりだ
もんな
…なんか外が
うるせーなぁ
おーいっ
霧島!!
笹岡…？
なんだよ一体
あした始業式だろ
今日 下で新入生の
入寮受付してんだよ
…へぇ
でさ…ちょっと
見に行かないか？

見にいって
どうすんの
今のうち少しでも
一年をチェック
しとくんだよ
………
ふん ふん
とりあえず体力
ありそうな奴を
5人ぐらい勧誘
したいんだよな
陸上部→
ぐっ
だからお前も
協力してくれっ
たのむぜ!!
やっぱりね…。
ワイ
ワイ
ワイ
今年はあんまり
寮の希望者が
いねぇんだな
そりゃできる
事なら寮生活
なんてしたく
ねーだろうし
遠い奴は仕方ないけど
ちぇっ
ザワッ

おい!あいつ!!
でっけーな
マジで一年か?
なんかムカツクー
あははは
ありゃ運動部の
勧誘がすごいぞ
まずバスケ部か
バレー部に
とられるな
うーん…
……あ
ピキッ
な…っ
ギロッ
なんだ
あいつー!?
にらみやがってー
よっちゃーん!!

こんな所にいたんだね！
きゅりん
遅いぞ
はやく受付すませてこいよ
あ…うん
よっちゃん背が高いからすぐわかったよ
……
……
おい霧島今の奴…男だよな？
女の子みて〜
男じゃなきゃ城東に入れるわけないだろ
…けどあいつどこかで見た事あるような…

グイッ
な…なんだ!?
クルッ
へっ
なんだよ霧島このカワイイのと知り合いかよ？
どーいう関係!?
ニヤ
ニヤ
…？
いや…
あの…俺に何か用？
…せっ
先輩ッ
お久しぶりです!!

へ…?!
せ…先輩?!
稔です 阿部稔
お久しぶりです♡
う…そだろ?
もじもじ
稔はやく部屋行こうぜ
よっちゃん
先輩 僕と同じ中学の吉田勝彦くん 3年の時同じクラスだったんです
……
ほら よっちゃん 霧島先輩だよ
…よろしく
ムスッ
こいつがあの稔──?!

…はぁ
可愛くねーガキッ
でかいけど
あ 先輩 僕の部屋108号室です よければ遊びに来て下さいねーっ!
にこっ
…なぁ
今の子おまえの後輩なんだろ? 今度紹介して♡
陸上部にマネージャーでほしいな~
ポーーッ
──
稔…あいつも寮にはいったのか
おい 知ってるか
1年にすっげえ可愛い奴がいるんだってよ!
女の子みたいなんだって?
ピクッ
…それってなんて奴?
えーと…
確か阿部とかいう名前の…
やっぱり!!

うわぁっ
先輩が僕の部屋に遊びに来てくれるなんて感激です!!
えーと…
別に俺は遊びに来たわけじゃなくて……
おまえ誰かに変な事されてないだろうな?
たとえば誰かにしつこくされたり教師がセクハラしたとか…
――は!?
?!
ベラ
あ…ほら中には同性が好きとかいう奴もいるから おまえ危ないかなとか――〜
ぐるぐる
何言ってんだ俺は――!!
ベラ
ベラ
それが目的でこの学校に入学する奴もいるらしいし〜
…もしかして心配してくれてるんですか?
大丈夫ですよっちゃんが助けてくれますから
!!
…よっちゃんて
フッ
あいつか…!
超目つきの悪い一年…
なるほど
たしかに背も高いし…あいつなら頼りになるかもな
ならいいんだ邪魔したな
じゃ!
…えっ!?
もう…帰っちゃうんですか?
どきっ
……
えーと…

ああんまり長居
しても悪いだろ?
思えば昔っから可愛いがってたけど
まいったな
こいつマジで
可愛いぞ
今は昔よりも頬とか首すじとかすっきりしてー
男とはわかっていても何故かドキドキする
なんかだんだん俺も男子校に毒されているのかもしんない
はぁ~
先輩…?
せんぱ…
大丈夫か?
風邪でもひいてんのか?
…いえ
…つくしゅん
びくっ

僕 花粉症なんで…
ぐしゅっ
は…
……
ちーん
ぷっ
…っ
くく…
先輩!!
何がおかしいんですかーっ!!
もーっ
いや…
悪い…
お前昔と変わってないんだな…
くしゃ…
あの時みたいに鼻をまっ赤にして
こいつは全然変わってないのに俺ってやつは…
なんかほっとけない所もそうだしな
うええん
ほの ぼの
先輩も変わってませんよ
一目でわかりましたから
にこっ

この歳でこんなに素直な奴は初めて見る
3年前と変わらない
なんか心配事があったら何でも相談しろよ
本当ですか!?
それじゃああの…
僕に勉強教えてくれませんか?
なぁ聞いた? 例の一年
なに?
最近3年の寮の部屋にいりびたってるって話だぜ
え——?
だってうちの寮個室だろー?! あぶねーじゃん
でもその3年とできてるって話だぜ?
誰だよそれ…
確か霧島とかなんとか…
…いいか? ここの応用は
こうしてこうなる
問題の意味と公式を覚えてれば簡単だ
そう…
ドキッ
Xを…こうして
ドキ ドキ
………
…しかしなんでここの高校に入れる奴がこんな問題わからないんだ?
ぼ…僕 数学不得意なんです
まあ…とりあえず勉強もはじめが肝心だからな
中間テストまで俺が面倒みてやるよ
ドン ドン ドン
おーい霧島ぁ!
ちょっと聞いてくれよーっ さっき学校でさあー…
ガチャ
笹岡…
!
ギクッ

あの噂…
本当だったのか…
?
その一年とできてんだろ?
はぁ?
お前はノーマルだと思ってたのに
なんだよその噂…
知ってるだろ稔(みのる)は俺の後輩
中間まで勉強教えてるだけだ
なんだ…
勉強教えてただけかよ~~~
マジで。びっくりした
変な誤解すんなよ!
お前が早とちりするから…
先輩は…
噂が流れてるの知ってた?
いや…初耳
じつはけっこう動揺している ↓
でもお前有名だから仕方がないかも…
僕は知ってたよ
え…
先輩は迷惑だよね
こんな噂…
でも僕は先輩との噂ならいいんだ…
だって…

…あ
はっ
バタン
ご…ごめんなさい!!
馬鹿だ…僕!
あんな事しといて
あやまるなんて…
いくら僕の気持ちを
知ってほしかったからって
あんなやり方…
最低だ…
僕は先輩との
噂ならいいんだ……

……
おい!
バン!!
あんた稔に何したんだよ
…おまえは…
確かなまいきな一年…苦手なんだよなーこいつ…
質問に答えろよ!
…勉強教えてただけだよ
それより勝手に部屋にはいって来るなんて非常識じゃないのか お前
一応俺は先輩だぞ。
そんなにはいってほしくないなら鍵でもかけとけばいいじゃねぇか

…あんた
稔の事どう思ってるんだよ
グッ
え……
俺は中学の時からずっとあいつのそばにいたんだ
初めてあいつの部屋に行った時あんたの写真がかざってあって…
一目見てあんたがあの写真の奴だってわかった
稔はおまえが好きなんだ
もしあいつの事をただの後輩としか思ってないなら
二度とあいつに近づくな!!

あいつは誰にもわたさないからなっ!!
あの時…
ただの後輩だって…?
今更…ッ
本当は稔を抱きしめてしまいそうだった
コンコン
先輩…
先輩いるんですか?
今更気付くなんて…
ほっとけなかったのは心配だったからじゃなくて
そばにいたかったからなんて――…
……稔
よっちゃんから聞きました
明日…来ないでくれって…
…勉強なら吉田に教えてもらえよ
同学年の方が能率いいだろ

僕が…
あんなことしたから…？
お前成績良いんだってな
……ッ！
数学も得意な方だって聞いた
それは…
それは先輩と少しでも一緒にいたかったから…
先輩とずっと一緒にいたくて一生懸命勉強してここの学校にはいって
嘘ついてごめんなさい
でも先輩が好きなんだ
稔…
す…っ
ぎゅ…っ
俺も…お前の事好きだよ
だけどどんな好きかよくわからないんだ――
お前を傷つけるかもしれない
…それでも
それでもいいよ
今だけでもそばにいてくれるなら

あたりまえですよっ!!
好きな人とじゃなきゃできませんっ
こ…こんなこと…
か〜っ
あのいつも一緒にいる吉田とも…?
よっちゃんはただの友達ですっ
俺…独占欲強いから
あいつに嫉妬してるのかもしれないな
…うそ
…ほんと
——嬉しい

ん…
せんぱ…
は…っ
あ…っ
稔…
お前こーいうの初めてだよな?
えっ!?
まじ…っ

ああ…
はっ
先輩…
恥ずかしい…よ
ん…
ビクンッ
平気か？稔…
ああ…ん ダメ…ッ
そんなとこ……
う…ん
気持ち いい…

あ…ッ
先輩…！
…っ！
あああ…ッ!!
………
大丈夫か 稔……
…先輩
ごめんなさい 僕抑えが きかなくて
こんなえっちな 奴だったなんて 恥ずかしい…

僕の事…
嫌いになりました?
まさか…
ぎゅ…
もっと好きになった
そのころの吉田は——
これでフラれて傷ついた稔を
俺が優しく……フフフ
シュミレーションしていた
おわり

b-BOY ビーボーイ
Zips ジップス 2
定価：本体800円＋税
大好評発売中!!
この命 つき果てるまで
激愛特集
君だけを愛しぬく!!
オール読み切り
青海信濃
碧磨あてね
大出なつみ
美輝 妖
緋色実
果桃なばこ
新田祐克
定広美香

# b-BOY Zips ①

第一刷発行1997年4月5日
第三刷発行1999年1月19日

●発行人●
山本裕昭
●発行所●
株式会社　ビブロス
〒162　東京都新宿区神楽坂6-67　FNビル3F
TEL 営業 03（3235）0333
編集 03（3235）0332
FAX 営業 03（3235）0510
振込00150−0−360377
●印刷●
東京書籍印刷株式会社
Printed in Japan

●EDITORS●
牧　歳子　岩本朗子
藤本賀子　戸中かおり
三好久子
●COVER DESIGN●
高津深春
●LAYOUT●
ビブロデザイン
清水新吾

乱丁・落丁はお取りかえいたします。
本文中のストーリーはフィクションです。
実在の人物・団体とは一切関係ありません。

定価はカバーに明記してあります。

ISBN4-88271-607-0

see you next book

# b-BOY Zips ①

蓮川　愛／スロウ・アンド・ファスト 1
内田一奈／愛ノコトバ 33
美杉果林／カレイド・スコープ 49
果桃なばこ／ぼくがオトナになっても 93
七瀬かい／金ボタンが冷たい 125
夢殿りさ／GOLD 158
野守美奈／Trace 184
皇極あかね／言葉を失くした人魚たち 221
イラスト／桑原祐子
星崎　龍／You and I 245

読者のページ 87　コミックレビュー 90　b-BOY Zips次号予告 277

COVER ILLUSTRATION
内田一奈

# Contents

感じたいから…BOYSマガジン
MAGAZINE BE×BOY マガジンビーボーイ
毎月7日発売

完全無敵のトキメキ、あげます
小説 b-Boy ビーボーイ
毎月14日発売

よりオトナの貴女へ…
BE・BOY GOLD ビーボーイゴールド
偶数月28日発売

Brought to you by

YAOI ARCHIVE

THE (UN)OFFICIAL ARCHIVE OF JAPANESE BL MEDIA

Please visit our website for more information and to learn how you can help.

**https://www.yaoiarchive.org/**

Archived by the *Yaoi Archive*
Sept. 30, 2024

Visit our website for our other archived magazines and books.

https://www.yaoiarchive.org/

BiBOY ZiPS ジップス 1

読み切り

学園特集号

BiBLOS

9784882716075

1920979008007

ISBN4-88271-607-0

C0979 ¥800E

ビブロス

定価：本体800円+税

KAZUNA UCHIDA

AI HASUKAWA

KAI NANASE

RISA YUMEDONO

KARIN MISUGI

NABAKO KAMO

MINA NOMORI

AKANE KOUGYOKU

YUKO KUWABARA

RYU HOSHIZAKI

COVER ILLUSTRATION
KAZUNA UCHIDA